扉 ～繋がる世界～

メトル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
扉　～繋がる世界～

【Ｎコード】
Ｎ８０４５Ｕ

【作者名】
メトル

【あらすじ】
ごく普通の中学生、葉隠　誠の所にある日一通のメールが届く。
『ゲームの世界に行ってみませんか？』
そうして抽選して当たった誠は友達の雅人と一緒に指定された場所へ・・・
そして二人が予想も出来なかった出来事が始まる・・・！！
いわゆる幻想入りですはい、作者の文章力に期待すると目が腐るんでやめたほうがいいです！

色んなアニメ、漫画、ゲームネタが飛び交います。元ネタを知りたい人は自分で調べてね☆
一応元ネタを書きまくって見る事にしました、回を重ねる毎に追加していきます。
東方、ニコニコ動画、モンスターハンター、とある魔術の禁書目録、ワンピース、アルプスの少女ハイジ、青鬼、ドラえもん、ジョジョの奇妙な冒険、ドラゴンボール、ギャグマンガ日和、名探偵コナン、キングダムハーツ、ＢＬＡＺＢＬＵＥ（ブレイブルー）、２ちゃんねる、ファイナルファンタジー、ドラゴンクエスト、北斗の拳、呪いの館、逆転裁判、エルシャダイ、ポケットモンスター、戦国ＢＡＳＡＲＡ、フェアリーテイル、涼宮ハルヒの憂鬱

第一話・運命

その場所には不思議な扉があった・・・

不思議な扉は色々な世界に通じていた・・・

だがその扉を通って帰ってきたものはいない・・・

いつしかその扉は封印され、人々は扉の存在を忘れていった・・・

そしてその扉は伝説となり、人々はまた夢と好奇心で扉を探し始めた・・・

だが見つけられたものは一人もいない・・・

そうして月日が経ち、扉は完全に人々から忘れられていった・・・

？「さ～てニコ○コ動画見よっと！」

とある家の中で中学生がパソコンをしていた。

中学生は黒髪に普通なスポーツヘア、身長は１７０と高めで体は少し痩せてる体形の男子。趣味はパソコンとゲームな、いわゆるオタクだった。

名前は葉隠（ハガクレ）　誠（マコト）。

誠「お？メールだ。知らんメールアドレスだな・・・ウイ〇スバスター仕事してくれよ・・・」

そう独り言を言ってメールを開いた。

誠「・・・なんだこれ？ゲームの広告か？」

そのメールには色々なタイトルのゲームが並べられ、
『こんなゲームの世界に行きたい人はここをクリック！』
と書いてあった。

誠「・・・ネトゲか？？まぁ面白そうだしクリックしてみますか！」

そう思い、クリックしてサイトに飛んだ。

誠「どんなゲームがあっるかな～♪」

鼻歌交じりに開いたサイトには・・・
『抽選結果は8月1日にメールでお知らせします！』
と書かれていた。

誠「抽選とか・・・俺が今までにどんだけ抽選をはずした事か・・・」

絶対当たらないと思いながらそのページをブックマークして他のサイトに飛んだ。

誠「当たんなかったらそん時はそん時だよな！」

そう思ってその日はニ〇ニコに没頭した・・・

誠「クソ！ここの弾幕どう抜けるんだよ・・・」

そう独り言を言っていたらメールが届いた。

誠「メールだ、ってちょｗｗｗかわせｎ（ピチューン）・・・またここで死ぬ・・・エ○ーマンが倒せないで替え歌作ってやろうか・・・」

そういいながらメールを開く。

誠「抽選結果？・・・あ～そんなんあったな・・・忘れてた。」

完全に頭から抜けていて思い出しながら抽選結果のページに飛ぶ。

誠「当たったかな・・・ｗｋｔｋ」

『抽選結果はこちらです！←』とあったので下にスクロールすると・・・

←

←

←

『残念！はずれてしまいました！』

誠「・・・」

誠は唖然とした。

誠「そこまで溜めといて外れとか・・・ｏｒｚ」

普通にがっかりしながらゲームに戻ろうとした時、

誠「ん？外れた人にキャンペーン？・・・まさか金取られないよな・・・」

そう言いながらキャンペーンページを開いたら
『クリックしまくれ！！』
と書かれてボタンがあった。

誠「連打？俺の得意分野ジャマイカ！」

そういいながらマウスの左に指を当ててカウントダウンに入った。

誠「3、2、1・・・うおおおおおおおおおおおお！！！」

無心でクリックをしまくり、タイムアップと同時にマウスが壊れた。

誠「げぇ！！マウスぶっ壊れた！！・・・親にばれる前に代えないと・・・」

そう小言で言っていたら結果が出てきた。

『あなたの順位は2位です！おめでとう！入選しました！』
と出てきた。

誠「2位？それよりマウス！予備あったっけ！？」

押入れを開いてマウスを取ってきたらメールがまた届いた。

誠「だれだよこんな時に！！」

うざったるく思いながらもマウスをセットしてメールを開いたら・・・

『入選おめでとう！ここに住所と電話番号を書いて送信してね！』
とあったので

誠「・・・大事なマウスを無駄にしたんだから送信するか・・・」

自分の家の住所とケータイの番号を書き、送信した。

誠「さて、やっとゲームに戻れｒ（倒せ～ないよ♪）うわ！！今度は何！？」

ケータイが鳴っていたので落ち着いて取ったら知らない番号だった。

誠「誰だ？・・・もしもし？」

かろうじて冷静を装いつつ、電話に出た。

？「あっ！もしもし？こちら抽選をさせてもらいました会社の者ですけど？」

電話からは女の人、大人だな・・・いや大人だからがっかりしてるってわけじゃないんだよ！別にロリコンとかじゃないからね！！

誠「あのゲームの世界がどうちゃらの会社ですか？」

と言うと、

誠「ハイ！あなたはハズレた人用のキャンペーンで全国2位の方ですよね？」

なんか失礼な気がする。とか思いながらも、

誠「ハイそうです、なんか貰えるんスか？」

と言っておいた。

？「ハイ、ではそちらに明日の朝6時に車が行きますのでそちらに乗って移動をしてください！」

・・・詐欺だコレーーーーー！！！確実に誘拐だーーーーー！！！

誠「スイマセンなんかそれはちょっと嫌です。」

？「でしたらお客様ご自身が今から言う場所に移動をお願いします！メモの準備はいいですか？」

俺はＧｏ○ｇｌｅマップを開いてから

「おｋですどうぞ。」

と言った。

？「では言いますよ？→→←←↑↓↑↓ＢＡです。」

誠「・・・それなんてコナミコマ○ド？」

？「へ？・・・ああ！スイマセン間違えました！！」

どんだけドジなんだよ・・・こんな間違え方する人普通いねぇよｗｗｗ

？「コホン・・・で、では言いますね！○県△市の□って公園です。」

誠「へ～以外に近いな・・・ハイおｋです。」

？「ＯＫですね？では明日６時に！」ガシャンッ！！

誠「電話置く勢い強すぎだろ・・・耳痛い・・・」

耳を押さえてケータイを置く。

誠「明日６時か、めんどくせぇ・・・」

そう思いながらも実はワクワクしていた。

誠「んじゃやっとゲームに戻れｒ（倒せーないよ♪）まｗたｗかｗｗｗ」

ケータイを取ると見覚えのある名前が画面に現れた。

誠「そしてお前かｗｗｗｗもしもし？」

？「よう誠！！今何してんだ？」

すごく明るい声な友人――山田（ヤマダ）　雅人（マサト）は俺の一番の友人で、よくゲームで対戦したりする。

大体負けるのは俺で結構ゲームがうまい、てか飲み込みが速い。

でもパソコンは俺のほうがよく扱えるからパソコン関係の事はよく頼みにくる。代わりにゲームのコツを教えてもらったりする。

ちなみにクラスも同じで席は俺の席から右に二個隣の席、見た目は俺と同じく普通。黒髪にスポーツヘアで俺より身長は少し小さいぐらいで痩せている。

誠「今か？弾幕と遊んでる～」

実はポーズから戻したら確実に弾幕に当たる位置にキャラがいる。

雅「体験版の分際で何を言っているｗｗｗ」

誠「う、うるせーな！手に入んないんだよ！しかたねぇだろ！」

雅「まぁいいや。そんで本題なんだけど抽選結果きた？」

誠「あ～あれ？当たったぜ！どうだ羨ましいだろ！」

俺は超誇らしげに言ってやった。

雅「へ～当たったのか！俺ははずれたけど連打ゲーで一位取ったから当たったわｗｗｗ」

誠「一位　お　前　か　ｗｗｗｗ俺２位だ！」

雅「なんだよ外れてるじゃねぇかｗｗｗお前そんなに運あったか？って思っちまったじゃねーかｗｗｗ」

むかっ！！バカにしてるな・・・！

誠「へ！一位か！どうせ連打しまくってマウスでもぶっ壊したんだろ！」

雅「マウス使ってないから大丈夫だったぜｗｗｗ」

誠「は？マウスしか使えないんじゃね～の？」

雅「なに言ってんだよ、ちゃんと説明にキーボードでもＯＫって書いてあっただろ？」

み、見てね～・・・でもキーボードってやりずらいだろｗｗ

誠「か、書いてあったなそういえば・・・でもキーボードもやりずらくね？」

疑問に思って聞いてみると

雅「連打のためにキーボードのキー全て取ったｗｗｗ」

誠「オーマイガッデムｗｗｗそんな事のためにｗｗｗｗｗ」

雅「いや～やりずらそうだからさｗｗｗｗ」

うわ～さすが雅人・・・根本的にすげぇなｗｗｗｗ

誠「まぁいいけどお前迎えの車に乗るの？」

雅「いや近くのあの公園が集合場所だからそこに自転車で行くつもり」

誠「おお、お前もか！俺もだから明日一緒に行こうぜ！」

雅「いいぜ～俺の家に５時集合な！」

誠「そんな速くて大丈夫か？」

雅「大丈夫だ、問題ない。」

誠「おｋじゃあ明日お前ん家に着いたらモン〇ンやろうぜ！」

雅「おｋ！次は俺をハンマーで飛ばすなよ？」

誠「大丈夫！あれわざとだしｗｗｗ」

雅「着地した所で大体攻撃くらうのはお前の計算かｗｗｗｗ」

誠「モチコースｗｗｗ」

こう言う計算のみうまい俺ってｗｗｗｗ

雅「出来る限り手加減してくれ・・・」

誠「お、おう・・いち・」

雅「そいじゃ明日な！」

誠「じゃあな！また明日！」プツン・・・

んじゃ！俺も用意して寝るか！

・・・の前にニコ〇コ動画いこっとｗｗｗ

そうして俺は１０時に寝る予定を変更して1時に寝た、１２時には布団に入ったんだけど・・・ｗｋｔｋが止まらなくて・・・ねｗｗｗ

だが俺はこの時は思ってもみなかった・・・

次の日から変な事に巻き込まれていく事になるとは・・・

・・・というのを一度言って見たかっただけだけどｗｗｗ

第一話・運命（後書き）

はい、メトルです。他のとこだとアランってニックネーム使ってます。
他のサイトにも小説書いてたんで見つけられる根性がある人は探してみてね！
見つかったら小説に出してあげたいぐらいｗｗｗ

今回はマルチな小説を！！と思ったんでこう言う設定。大体ノリで書いてるから設定がどっか飛ぶかもｗｗｗそん時は指摘してくれるとありがたいですｗｗｗ
ではまた次回に！！

第二話・出発（前書き）

前書き書く暇あったらネタ考える時間が欲しいなり。

おまたせしました二話目公開です！

第二話・出発

ppppp・・・ppppp・・・

目覚まし時計が鳴った。
今は朝の４時頃だ、普通ならあと８時間は寝ている。
部活をやらずに１２時になるまで寝ている誠にとっては寝たくてしょうがない時間だった。

誠「う～ん・・・あと１０時間・・・」

ppppp・・・ppppp・・・

それでも目覚まし時計はなり続ける。

誠「だーもう！うるさいっ！」

そう怒鳴ると誠は目覚まし時計のスイッチを押し、部屋の反対側の壁に投げ飛ばした。

ガシャンッ！！

衝撃で目覚まし時計が壊れて中身が飛び出てしまった・

誠「うーん・・・あれ？目覚まし時計どこだ？」

投げた張本人は目覚まし時計が無い事に気付き辺りを見回したら、壊れて使い物にならなくなった時計だったものがドアの近くに散らばっている。

誠「げっ！またやっちまった！これで何個目だ・・・」

ちなみにこれで壊れた目覚まし時計は８つ目にあたる。

誠「・・・帰りに買ってこよう・・・」

そう言って布団から出た。

誠「・・・眠い。」

眠い目をこすりながらも身支度を済ませ家の前に出た。

誠「さて、雅人の家に行くか～・・・」

俺は自転車を庭から引っ張り出し、勢いをつけて飛び乗った。
あぁ・・・風を切る爽快感・・・やっぱ自転車って気持ちいいよね！
そうだ、コンビニ寄ってコーラ買っとくか。あいつの分もついでに買っといてやろう！２倍で返してもらうけどｗｗ
自転車を止め、コンビニでコーラ二本買い、また自転車に飛び乗って雅人の家に急いだ。

誠「よっし到着。」

雅人の家は普通な一軒家・・・では無い。
とにかくでかい。武家屋敷か？と聞いたら全然とか言われた。
家賃が凄く安いからこの家にしたらしい。幽霊でも出るのだろうか？
まあそこら辺は今度聞いてみる事にしよう。

誠「着いたにはいいけど起きてるか心配だな・・・」

雅人って朝に凄く弱いんだよね～、前に学校行事でキャンプ行く朝に迎えに来たらあいつなにしてたと思う？

家に上がってあいつの部屋入ったら寝てるんだぜ！しかも目覚まし鳴ってる中で！
挙句の果てにベッドから落ちているにもかかわらず、いびきかいて寝てるという神業を披露ｗｗ
蹴り起こしたら背負い投げ喰らいましたマジで。
帰宅部のくせに柔道やってんじゃねえよ！って怒鳴ったら、へ？おまえが転んだろ？とかぬかしやがった。
たぶん雅人の母親はバトルマスターかなんかだな、子は親に似ると言うし。
とりあえずインターホン鳴らして母親に鍵を開けてもらい、部屋に直行したら・・・

誠「お？今日は起きてる。」

雅「これから面白い事が始まるというのに寝てられるわけないだろｗｗｗ」

・・・と言う風にはならなかった。

案の定あいつは普通に寝てた。着替えや準備は済んでるから俺が来るまでの仮眠だろう。

誠「はぁ・・・おい雅人～起きろ～・・・って言って起きてるわけないｋ「起きてるぜ！」グハッ！！」

いきなりベッドから起き上がり俺の腹に右ストレートを入れてきた、ヤバイ、普通に痛い。

誠「ゲホッ！ゲホッ！何故に右ストレートを・・・ぐふっ」バタン

雅「なんか俺の家の前にお前がいる時に凄くむかついたから、お前変な事考えてたろ？」

こ、こいつ読心術を・・・！しかもあの距離で心を読んだのか！！ちなみにあいつの部屋は玄関から３０Ｍぐらい離れた所にある。

誠「な、何故あの距離で心を読めた・・・てか俺が家の前にいても部屋からは見えないだろ！」

雅「実は屋根の上にいました。テヘペロ☆」

誠「テヘペロ☆じゃねーよ・・・痛い、痛すぐる・・・」

なんとか痛みも消えてきた、これあざになるんじゃね？と心配したが特にあざは無かった。

雅「さあモ〇ハン始めようぜ！」

誠「お、おう・・・」

ＰＳＰを取り出してモン○ンを始めた、今の時間はちょうど5時、
３０分はできるだろう。

～キングクリムゾン！！～

誠「くそコノヤロウ！だから時間のかかる奴はやめようと言ったんだ！！」

雅「っざけんな！それに同意したお前も悪いってんだコノヤロウ！！」

とか言いながら全力で自転車のペダルをこぐ俺達。
・・・なんでこうなったか？それはだな・・・

～回想のターン！！～

誠「よっし四面楚歌クリア！・・・ちょっと早いけどそろそろいこうぜ！」

雅「なに言ってんだよ！あと１０分あるだろ！そのまま続行だ！！」

誠「・・・しょうがねぇな！なにやんだよ？」

雅「う～ん・・・アルバ○リオンでも行くか？素材足らんし」

誠「俺とお前が一番苦手な奴だぞ？１０分でいけるか？」

雅「大丈夫！集合場所へ頑張れば１５分で行けるだろｗｗ」

誠「ふむ・・・まあ行けるか！よしやろうぜ！」

雅「おｋ！」

はいこの後が重要です！テストに出ますよ～！
この後アル○トリオンに苦戦し、クリアしたのが集合１０分前と言うベタなオチが待ってましたｗｗ

～回想のターンエンド！！～

誠「おい信号変わったぞ！急げ！！」

雅「あ、あぁわかった！！」

とまぁ急いでいます、ちなみに後2分で約束の時間・・・やっべ・・・

・

雅「クソッタレアルバト〇オンめ！よくも俺の時間を奪いやがったな！！」

誠「ゴチャゴチャ言ってんじゃねぇよ！走れ！！」

雅「おkだコノヤロウ！！」

・・・足痺れてきたｗｗ

誠「見えた！あそこだ！！」

雅「よし！残り1分ある！！突っ走れ！！」

誠・雅「間に合えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・

雅「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

誠「はぁ・・・はぁ・・・」

誠・雅「ま、間に合ったぁ・・・」

とりあえずギリ間に合った、残り１０秒位でアウトだったらしい、公園の門は今スーツ来たジェントルメ～ンによって閉められた。

雅「おい誠・・・人少なくね？」

誠「ああ・・・そうだな」

今この公園にいるのは・・・

俺　雅人　俺と同じ位の歳の子供　俺より下・・・小４位の子供

高校生・・・だと思われる子供

ジェントルメ～ン　ジェントルメ～ン　ジェントルメ～ン　ジェントルメ～ン　ジェントルメ～ン

・・・ジェントルメ～ンが五人か。

雅「なぁ誠・・・俺達ってもしかして結構ラッキー？」

誠「いや、俺等はラッキーじゃなくて実力だけどなｗｗ」

雅「・・・そういやそうだった」

・・・なんかワクワクしてきましたｗｗ
選ばれたのが五人・・・それに俺が入ってるんだぜ？テンション上がるわｗｗｗ

『当選者の皆様、公園の中央にお集まりください』

・・・耳痛い！あんな音量でメガホン使うなよ！！

雅「・・・とりあえず行くか？」

誠「おう・・・他の奴らも集まってるしな」

雅「よしじゃあ一番最初に着いた方が負けたほうに命令しておｋな！よーいドン！」ザッザッザ・・・

誠「あ！てめ！卑怯だぞ！！」ザッザッザ・・・

・・・勝負の結果？もちろん勝ったぜｗｗ
俺をなめちゃいけないよ・・・これでも体育祭の５０ｍ走では無敗の男だぜ！
クラスだと俺は１位、雅人は確か・・・１３か１４位だった気がする、ちなみに俺のクラスは合計３０人だ。
そんな足の持ち主に競争はしかけてはいけないだろ普通ｗｗ

雅「お前やっぱ足速いよな・・・こんど教えてくれよ・・・」

誠「めんどいからパス」

雅「・・・ヒデェ（小言」

誠「なんか言いましたかね？雅人くん？」

雅「なんでもないでございまするｗｗ」

・・・絶対なんか言った。

『当選者の皆様！これから移動しますのでバスにお乗りください！』

うるせぇ・・・耳がクソ痛い・・・どのぐらいうるさいかと言ったら・・・

部屋のテレビを最大音量にして悲鳴を聞いた感じ。

鼓膜は大丈夫だろうけど精神的にアウトｗｗ

雅「・・・なぁ誠？」

誠「・・・言うな、俺もわかってる」

雅「・・・ですよねー☆」

俺達二人が思ったこと・・・それは・・・

誠・雅「移動するのかよ！！」

雅「ここまで必死こいて来た奴（俺達）の努力が水の泡じゃねぇか

！！」

誠「てかバスで行くなら途中で拾っていってくれよ！！」

誠・雅「あ」

・・・・・・・・・・

雅「車来るって言ってたの・・・あれバスのことだったのか・・・」

誠「・・・バス乗るか・・・」

雅「・・・おう・・・」

俺らの苦労っていったい・・・

とりあえず座って寝てるかな・・・

雅「おい、俺寝るわ」

誠「奇遇だな、俺もだ」

雅「・・・どうせ自転車必死にこいで疲れたんだろ？」

誠「ばばば、バカ言うなよｗｗお前こそ疲れたんだろ？ｗｗｗ」

雅「ななな、何を言ってるのかねチミは！」

誠「・・・んじゃあ寝るｗｗ」

雅「・・・俺も」

こうして二人とも寝た、目を瞑ってゆっくりと意識が沈ｎ・・・グー・・・ｚｚｚｚ

（この間５秒）

？「・・・お―、起―ろ―」（おい、起きろ！）

・・・誰だ？もう着いたのかな？寝ぼけているせいか声がうまく聞き取れないな・・・

？「―お―ろ―て言――んだよ《起きろって言ってんだよ》！！」

・・・なんか怒ってる気がしないでもない。まぁ言われてるのは雅人だから無視しよう・・・

？「このクソガキ！！起きろって言ってんのが聞こえねぇのｋ「う

るせー！！」グハッ！！」

・・・雅人・・・投げるのはいくない、うん。

雅「人の眠りの邪魔すんじゃねぇってんd・・・ここどこ？おい誠！着いたぞ」

ん？着いたのか・・・じゃあ起きるとするか・・・

誠「ふわ～よく寝t・・・おい雅人？なんで床にジェントルメ～ンが3人寝てるのかな？」

雅「知らない、勝手に寝てる奴らが2人、俺が投げたのが1人だぜ」

誠「・・・犯人はお前だ！雅人！気付かぬうちに2人も投げたのか！！」

雅「ちょ！ちが！俺は無実だ！！」

誠「・・・ではなぜにこいつらの手首に同じあざがあるのかな？しかもこれは人の手の跡だぜ？」

雅「・・・」

誠「やったんだろ？お前が」

雅「＼（＾０＾）／」（オワタ）

誠「認めたな！逮捕すr・・・っとそろそろ外出るか。」

雅「お、おk・・・」

二人で漫才してる間に他の奴らが全員でたので俺らも出ることにした・・・

ここで一つ言っておく！

誠「続きは次回！！」

雅「・・・誠・・・それは誰に向かって言ってるんだ？」

・・・あえて無視。

誠「ではまた次回お会いしましょう！さようなら！さようなら！」

雅「・・・」

第二話・出発（後書き）

誠「どうしてこうなった」

作「なんでってネタが切れt・・・ゲフン！長くなったから次回にと」

誠「・・・ネタ切れならしかたない」

作「な、なにを言っている！ネタ切れでは断じてない！！」

雅「・・・ダメ作者」

作「か、仮にもお前達は俺が創ったんだぞ！歯向かうと出番無くすぞ！！」

誠「主人公の俺より雅人の方が好きな作者がか？」

雅「主人公は出番少なく出来ないし、俺はお気に入りだから少なくしないという魔のジンクスが出来てるのにもかかわらずか？」

誠「無理だな」

雅「無理だろうな」

作「・・・サーセンでした・・・」

誠「・・・では読者の皆様！また次回に！」

雅「さようなら！」

第三話・到着（前書き）

ネタ切ｒ・・・区切っただけだけどうｐするの忘れてたぜ！ほほほ本当だぜ！

あ～あと、この小説は作者の妄想８０％、ノンフィクション２０％となっております。

一話目の誠は大体作者の私生活を表しておりますｗｗ

名前とかは全員変換していますけど誠の体系、髪型は大体作者です。性格とかそこらは結構違うのかな？

では本編どうぞ！

第三話・到着

・・・バスを降りたら目の前に古い屋敷があった。

誠「続きを言う前に言っておくッ！俺は今、ここの場所をほんのちょっぴりだが理解した。い・・・いや・・・理解したというよりはまったく理解を超えていたのだが・・・・・・・

あ…ありのまま今いる場所の事を話すぜ！

俺はバスで寝ていたらいつのまにかバスは古い屋敷の前にいた

な・・・何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった・・・頭がどうにかなりそうだった・・・催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえもっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・」

雅「いや寝てただけだろｗｗ」

はい正論です、本当にありがとうございました。

誠「・・・これは青鬼の世界へＧＯか？」

雅「青鬼はないべさすがに・・・俺なら勝てる自信あるけどな！」

誠「ここで青鬼に興味を持ってしまった読者！悪い事は言わない、ググるな。キモグロすぎて洒落にならんぞ」

雅「・・・誰に向かって言ってるんだ？誠」

誠「いんや、独り言だ。てかさすがに雅人でも青鬼には勝てないだろww」

雅「いや！勝てる！てか投げれる！！」

誠「・・・その根拠は？」

雅「原作に石鹸がアイテムであったろ？あれで滑らしながら投げるという魂胆よ！」

誠「・・・石鹸無かったら？」

雅「・・・さあ入ろうか」テクテク・・・

誠「ですよねー☆」

いつの間にか他の奴らはみんな屋敷の中に入ってしまった。

誠「・・・誘拐オチはありませんように」

そう願いながら入ったらみんなもういなかった。

誠・雅「あれ？」

二人は同時に首を傾げた。

雅「・・・なあ誠？」

誠「それ今日何回目だ？」

雅「3回目だ、あいつらどこに消えた？」

誠「いや4回目だろ、さあ？」

雅「いや聞いたのは4回だが1つはおい誠だ、どうする待つか？」

誠「おk把握した、いや待つより探すのが吉と見た」

雅「何故にだ？待ったほうが楽だろ？」

誠「屋敷を探検できるだろ！！」

雅「おk！張り切って探すぞー！！」

誠「おー！！」

流石雅人！他の奴らには出来ないノリを平然とやってのける！そこに痺れる憧れるゥ！！

雅「よしまずは一番右のあの廊下からだ！」

誠「よしおk！一番人がいないとこからって魂胆だな？」

雅「わかってるじゃないか！行くぞ！」

ホント誠は物分りがいい。
ゲームでも自分では解ってないけど教えられると上達が早い。
俺は基本をマスターしてからアレンジを加えて自分流のゲーム攻略をするがあいつは基本をマスターしない。
説明書を読まないで基本が出来てないのにもかかわらずアレンジを加える、だから色々と下手になる。基本が出来てないから弱いのだ、でも基本ができると俺より強い。
たとえば説明書を読ませた後に知らない格闘ゲームをやらせたらものすごいスピードでクリアしやがった。
でも説明書無しのゲームを買ったら俺がクリアした時にあいつのレベルと３０位のレベルの差があった。
その後俺が基本を教えたら2時間で追いついてきた。いくらなんでも早すぎるだろｗｗｗ
教えなくても解る単純なゲームをやらせれば天下一だろう、連打ゲーも入っている。あと何故か知らんが推理ゲームも結構できる。

あいつが言うに「探して当てて事件解決すればいい単純なルールだからな！」とか言ってた。
ちなみに俺も推理ゲームはやるけどあいつは俺のクリア時間より5時間程度は早くクリアする。
とりあえずこれから誠に意見を聞いて行動しとこうか・・・ミスったら見つかって怒られるだろうし。

誠「雅人！ドア開けるぞ！」

雅「おｋ！」

さて・・・何が出るかな～っと！

誠・雅「！！！」

そこにはバスにいた（投げられたジェントルメ～ンを除く）全員がいた。

誠「・・・はずれたな」

雅「・・・スマン」

・・・一回目ではずれはないだろ・・・いないと思ったのに・・・。

メガホンを持ったおっさんがこちらを向いてジロッとこちらを見てくる。

メ「お前らどこに行ってたんだ！それとスーツの３人知らないか？」

誠「すみません！ちょっとトイレに行ってました！」

雅「付き添ってました、あとスーツの３人ならバスでなんかやってました」

本当は俺が投げたんだけどね～ｗｗ

メガホン持った（ｒｙ「ったくしかたないな・・・わかった、そこに集まって座っておけ」

誠「は～い」

雅「ふぇ～い」

・・・誠には感謝しないとな、とっさに理由考えてくれたしジェン

トルメ～ンの事ツッコまなかったし。
とりあえず座ってお話を聞きますか。

メ「よーし二人が来たから解説を始める」

誠・雅「ｗｋｔｋ」

メ「そこ喋るな！まずお前らにこのアンケートを渡すから書いてもらう。
そのアンケートを書き終わったら右にある部屋に二人一組で入ってくｒ・・・っと一人来てないから五人だったな。しかたない、余りの奴は一人で入ってきてくれ。」

こんな楽しいところに来ないとか可哀想にｗｗｗ

メ「よし、じゃあ配るぞ～ペンが無い奴はそこにあるからもってけよ～」

当選者全員「は～い」

全員が返事したのを確認してメ（ｒｙは右の部屋へ入っていった。
さて、どんなアンケかなっと・・・

雅「・・・なあ誠」

誠「なんでございましょう？」

雅「アンケが凄くあれなんだが・・・」

誠「そうなん？どれどれ・・・・・・えー・・・」

雅「・・・な？」

誠「・・・問題少なすぎだろッ！！なんでたった二問なのにアンケ用紙使ったしｗｗｗ」

雅「しかも大きさが原稿用紙一枚分の大きさというｗｗｗ」

誠「・・・とりあえず書いてさっさと出そうぜ」

雅「おｋ」

誠「んじゃ一問目、行きたい世界はどこですか？・・・どうする？」

雅「俺はモンハンかドラクエかＦＦかゴッドイーターかロードオブアルカナかロックマンか東方かダンガンロンパかｅｔｃ・・・」

誠「多いってのｗｗちなみに俺はフェアリーテイルか．ｈａｃｋかブレイブルーかプリニーか魔界戦記ディスガイアか東方かメタルギアかな」

雅「誠も多いってのｗｗどうする？」

誠「うーん・・・さっき東方が唯一被ってたよな？」

雅「えっと・・・うん、多分そうだったな」

誠「じゃあ東方でよくない？」

雅「お前東方苦手じゃないっけ？」

誠「大丈夫だ、問題ない。」

雅「おk！じゃあ東方な！んじゃあ第二問、欲しい能力を三つまで書いてください、ただし限度がありますので注意してください、だとさ」

誠「・・・ゴムゴムの実的な能力とか魔法が使えるようになるとかできんのか？」

雅「ちっさｗｗｗ考える能力が小さいぞｗｗｗもっとこう一方通行さんみたいな能力とかあるだろｗｗｗ」

誠「・・・そ　の　発　想　は　無　か　っ　た」

雅「俺はとりあえず肉体強化だな、体が弱くちゃ洒落にならん。」

誠「それいいな、俺もそれ一個。」

雅「後は・・・不老不死。」

誠「それは苦しくないか？不老不死って事は死ねないんだぞ？不老を付けてるだけでもう妖怪級の強さだろ？」

雅「ふむ・・・じゃあ自殺をしない限り死なない不老不死がいいな」

誠「それいいな、採用。」

雅「最後は・・・個人で決めようぜ！」

誠「おｋ！何にしようｋ「出来た！！」速ッ！速すぎるだろｗｗｗｗ」

雅「だって長年夢見てた能力だもの！誠も早く決めろよな。」

誠「お、おｋ・・・」

～～～～１０分後～～～～

誠「出来た！！」

やっと書き終わった！雅人はなんであんな早く書けたのか疑問だぜ・・・

雅「随分と悩んだなｗｗｗ」

誠「そりゃ悩むだろ、これで強弱がはっきりついてしまうんだぜ？」

雅「大げさだなｗｗｗじゃあとっとと出そうぜ、残ってるのは俺達と余りのみだぜ。」

誠「おｋ！」

そのままアンケ用紙を持って隣の部屋に行った。するとそこにあったのは長イスと扉、扉には張り紙があった。

誠「張り紙があるぞ？雅人、音読よろしく」

雅「俺！？なぜに音読！？」

誠「だって俺が聞こえないだろ？」

雅「自分で読めしｗｗｗ」

誠「バス乗る前の競争の件忘れてるなｗｗ俺はイスに座っているぜ～」

雅「・・・じゃあ読むぜ、ドアの中央にあるプレートの色が赤だったら入らないでください、お話中です。青だった場合入ってください、中でお話があります。アンケート用紙はその時に提出してください。・・・だとさ」

誠「おｋ把握した、で？今何色？」

雅「あｋ・・・青になった。」

誠「じゃあ入るか・・・よっこらせっと！」

ギィ・・・

いかにも古い扉ですよーと言ってるような音で扉が開く部屋の中に入ったらさっき解説してくれたメガホン持ったおっ（ｒｙが机越しのイスに座っていた。

メ「お前らか、たった二問答えるだけだろう・・・遅いぞ！」

誠・雅「サーセンフヒヒｗｗｗ」

メ「・・・まぁいい、そこのイスに座れ」

誠・雅「は～い」

っと返事した後メガホン（ｒｙの向かいにあるパイプイスに座った、ちなみにメ（ｒｙのイスはもろ社長イスである。机は会議室にありそうな横長の机、もろ面接だな・・・と思いながらもアンケ用紙をメ（ｒｙに渡してパイプイスに座った。

メ「・・・ほう・・・東方か。」

誠「はい！知ってますか？」

メ「愚問だ、俺は正規発売されているゲームは全部クリアした。アイテム、図鑑、ギャラリー、エンディング、全てな。」

・・・嘘だろｗｗそんな人間いたら対戦したいもんだｗｗｗ

雅「へ～、是非対戦でもしてみたいですね！」

メ「機会があったらやってやろう・・・機会があったらな。（ニヤ」

こわｗｗニヤっとするなｗｗｗｗこわいわｗｗｗｗｗ

メ「では今からいくつか質問する、正直に答えろ」

誠「はい」

雅「は～い」

メ「よしじゃあ一つ、お前らゲームは好きか？」

誠「もちｒ「もちろんですッ！！」・・・です」

雅人声でかいっての・・・耳痛いジャマイカ。

メ「よしわかった、質問終了だ。そこの扉に並んで立て」

・・・え？一つ？さっきいくつかって・・・まあいいかｗｗ

雅「ｗｋｔｋ」

雅人超ワクワクしてるしｗｗｗｗ

誠「扉の前に・・・こうですか？」

メ「ようしいいぞ、それでは・・・」ガシッ！！

！？俺の襟首掴まれたんだけど・・・あ、扉開いてく・・・

雅「なんじゃこりゃ！？ドラ〇もんの四次元ポケット的な空間が！！」

誠「ちょｗｗｗｗすげぇｗｗｗｗｗｗｗ」

これはいいものを見たｗｗｗ・・・てかそろそろ話してほｓ「そぉい！！」・・・え？・・・

第三話・到着（後書き）

作「・・・なんで中途半端なのかって？そうした方が次話の文字稼ぎがでｋ・・・ゲホゲホ、次話が楽しみになるではありませぬか。」

誠「そんなアホ作者は逝ってよろしい、雅人カモーン」

雅「おｋ！」ガシッ！！

作者「え？ちょ・・・腕を掴んでなにをするｋ「そぉい！！」うわあああああああ！！！」

誠「・・・ではまた次回にお会いできるとうれしいです！さようなら！」

雅「ノシ」

第四話・空中（前書き）

悪夢のおかげで６時に目が冷めてしかも悪夢をネタに使わせてもらった。
俺は転んでもただ転ぶだけの男じゃないぜ！！
ハーハッハッハ！！青鬼ザマァ！！！
あ、では第四話はじまります。

第四話・空中

雅「ここで誠に問題だ、今俺達はピンチ？」

誠「・・・・・・・・・イエス」

雅「・・・ファイナルアンサー？」

誠「・・・ファイナルアンサー・・・」

雅「・・・」

誠「・・・」ゴクッ・・・！！

雅「残念不正解！！」

誠「あああああやっちまった・・・」

雅「ピンチではなくてもう終わってます」

誠「っておい！！」ビシッ！！

よしわかった、諦めかけてる雅人に代わって俺が・・・説明しよう。
俺らは今、落ちてる。
多分あれだ、スカイダイビング（パラシュート無し）やってる感じだ。
高さは正確にはわからん、とりあえず物凄く高い。地面が見えないんだぜ？もう隕石にでもなった感じだよ。

・・・で、こんな危機感の無い漫才してるんだがｗｗｗ

雅「そうだ！能力使えばいいんだ！！」

誠「・・・なにそれ？」

雅「ほら！アンケで書いただろ？」

誠「いやｗｗ書いただけで能力が得られたらすげぇよｗｗｗｗ」

雅「でもあんな非現実的な物見た後だぜ？試す価値はあると思う」

誠「・・・じゃあ聞くけどお前が書いた能力は空でも飛ぶ能力か？」

雅「・・・いや違いますけど何か？」

誠「・・・じゃあこの危機を打開出来る能力か？」

雅「出来ませんけど何か？」

誠「意味ねぇじゃんかよおおおおおおおお！！！！」

雅「だから誠に言ったんじゃん、お前の能力は？」

誠「・・・出来る確率は３０％って所かな」

雅「マジで！？３０％もあんの！？よしやろうか！！」

誠「待て・・・結構タイミングがシビアなんだ・・・てか能力って

どうやって発動すんの？」

雅「ポケットに紙が入ってるから見てみ？」

誠「・・・何故入ってるし」

雅「さぁな、まあ簡単だろ？念ずるだけ、声は出さなくてもいいから敵に攻撃も読まれないし楽だろ？」

誠「・・・おｋ」

雅「なんか手伝う事は？」

誠「出来れば俺から半径５ｍ以内にいて欲しい、しがみつくと直良し」

雅「お、おｋ・・・」ギュッ

誠「・・・地面が見えたら発動するからな」

雅「おｋ！」

誠「・・・見えた！！地面が見えた！！」

雅「なにク〇ラが立った！的な事言ってんだよｗｗｗ」

誠「いや言ってみたかっただけですサーセンｗｗｗ」

多分もう１０ｋｍも無いだろう、見渡すと自然溢れる森や大きな町

も見える。

雅「そういや誠の能力どんなの？」

誠「・・・想像した物を具現化出来る程度の能力、しかも物のみでは無く魔法とかも具現化出来る」

雅「うは万能ｗｗｗｗそれでワープとか空飛んだりすれば１００％じゃ？」

誠「ワープ魔法だと場所指定しないと出来ないしここらの地名は知らない、空飛ぶ方はイメージがしづらい」

雅「じゃあなにして回避するわけ？」

誠「地面にぶつかる寸前に衝撃波かなんか出して衝撃を和らげる、まぁかめ〇め波的なイメージ」

雅「ほう・・・それはまた面倒だな」

誠「でもやらないと終わるからなぁ肉体強化しても不老不死でもさすがに痛みは和らがないだろうし」

雅「下手すれば骨どころか筋肉崩壊するな」

誠「さすがにそれはヤバイ、てかキツイ」

雅「・・・そろそろぶつかるぞ！気をつけろよ！！」

誠「おｋ！・・・」

雅「・・・・・・？どうした？」

誠「・・・・なぁ」

雅「・・・・なんだ？」

誠「・・・・」

雅「・・・・」

誠「・・・・」

雅「・・・・」

・・・・・・

誠「かめはめ波ってポーズ恥ずかくない？」

雅「溜めといてそれかよッ！！！やれよ！てかやってください！！！」

もう地上は近い、後1分もしたら激突するだろう。

誠「・・・・！！」ポン

誠の手から巻貝のような物が出てきた。

雅「・・・それまさかワ〇ピースの空島にあるダイヤルか？」

誠「ああ、インパクトダイヤルだ、これでぶつかる衝撃を吸い込む」

説明しよう！インパクトダイヤルとは巻貝の形をした物でこれに衝撃を与えるとその衝撃を吸収する。そしてスイッチを押すと、溜めた衝撃を放出する事が出来るのである！

雅人「・・・ホント万能だな」

誠「当たるぞ！しっかり掴まってろよッ！！」

誠がダイヤルを構える、雅人はしっかりと誠の服にしがみついた。

・・・ぶつかる！

3

2

1

0！！フワ・・・

誠「・・・ふぅ」

雅「・・・うまくいったな！」

誠「・・・なあ雅人？」

雅「どした？」

誠「・・・キントウンでも飛行機でも出せばよかったかも」

雅「ん～・・・キントウンは誠が乗れないと思うけど飛行機か～・・・盲点だった」

誠「そうか～キントウンは雅人が乗れないからダメか、ちょっと飛行機出してみるか」

雅「お～い俺の言った事なんか変換されてるぞ～、逆なんだけど～」

誠「さあ出すぞ～・・・ハッ！」

・・・フシュ～

雅「華麗にスルーしてしかも飛行機出せてないし」

誠「う～ん・・・イメージ不足かな？」

雅「・・・そろそろ移動しようぜ腹も減ってきたし」

誠「腹減った？何食いたい？」

雅「・・・メロンパン」

誠「・・・」ポン「ほいよ」

雅「お～本当に万能だな～・・・いただきます！って不味ッ！！」

誠「えｗｗｗマジで？」

雅「蟹の食べれないとこみたいな味がする、お茶頂戴」

誠「・・・」ポン「・・・ほい」

雅「ありがとう・・・カリ！これは青酸ペロ！！」

誠「いや逆だよｗｗｗてか毒物かよｗｗｗｗ」

雅「・・・お前の能力の欠点は食べ物は無理って所とイメージ不足か・・・」

誠「・・・そろそろ行こう、日が暮れるぞ」

雅「おう！」

今俺達は道をひたすら歩いてる、俺はちょっと能力でコ〇ン君ボード出してるから立ってるだけだが。

雅「・・・俺にもなんか乗り物だしてくれ・・・」

誠「ん？なにがいい？」

雅「それはもちろんキーブレードだろ！ライド出来るし武器になるし！！」

誠「・・・ゴメン俺キンハは2の記憶しかない」

雅「・・・ハァ・・・」

実は鮮明に覚えてたりするがキーブレードは俺が後で出すから出させぬ。

誠「・・・そういや雅人の能力は？」

雅「腹減ったな～・・・あ？俺？俺の能力は・・・

二次元を三次元にする程度の能力・・・だぜ」

誠「・・・どゆ意味？」

雅「たとえば漫画、アニメ、いわゆる二次元のキャラの能力を使える、ただし制限ありで」

誠「制限？」

雅「たとえば物は出せないし強力なのは出せない、一方通行さんとかヤミヤミの実とか

他には生き物も呼べない、あと能力を出すにも限界がある、自分のＭＰ的なのがわかるぐらいだし」

誠「ちなみに今どのぐらい？」

雅「・・・１」

誠「戦闘能力たったの１か・・・コケめ」

雅「どこの王子だそれはｗｗｗｗｗ」

誠「じゃあ空も飛べないな・・・修行が足りぬのう・・・」

雅「いきなりジジイになるなｗｗ」

誠「・・・あ！じゃあこんな乗り物をあげよう！」・・・ポン

雅「・・・これは何か？どう見てもカービィが乗る星じゃ・・・」

誠「ええ☆ですけど？」

雅「・・・うっわ乗り心地悪・・・」

誠「イメージで凄く乗りにくそうにしといたわ♪」

雅「いらねぇよ！！！」

誠「え～・・・じゃあこれで・・・」・・・ポン

雅「・・・これなに？」

誠「え？いや見ればわかるでしょ？」

雅「・・・これは乗り物じゃないだろ？」

誠「なに言ってるんだ！ガ〇ダムは列記とした乗り物だあああ！！！」

雅「・・・どちらかというと兵器だろ・・・」

誠「まあレプリカだから飛ばないし銃も持てないけどねｗｗｗｗ」

雅「・・・もう普通に歩く・・・」

・・・っと漫才をしていたらいきなり暗くなった

誠「・・・」

雅「・・・なあ誠？」

誠「・・・なんだね？」

雅「この現象って・・・あのお方だよね？」

誠「ええ・・・あのお方ですね・・・」

雅「・・・なんか東方の世界にこれたんだな～ってやっと実感できた」

誠「・・・だよな」

雅「・・・でも最初に会うのは脇巫女が良かったぜ」

誠「あの紅魔卿最初のボスに一番最初に会うとは思わなかった・・・」

雅「・・・そういやあのお方は人間食うんじゃ・・・」

誠「・・・ちょっと走ろうか・・・」

雅「そそそ、そうだな・・・」

？「そんなに急いでどうしたの？」ビクッ！！！

後ろから話かけられた、声からして女性・・・まあ大体誰かなどわかっているが。

誠「・・・いや腹減ったから飯を食べにいこうかと・・・」

？「そーなのかー」

誠「で、では失礼しますね・・・」

？「でもその必要は無いわー」

誠「・・・へ？」

？「あなたは食べられる人類？」

誠「違うわ！！」

誠はすぐに振り向き間合いを取った、暗闇で相手の姿はほぼ見えない、輪郭が見えるぐらいだ。
体系は女の子といった感じ、・・・はいそこ幼女ハァハァとか言ってるんじゃない！

雅「・・・やっぱりあのお方か・・・」

誠「声と体系を見ればよくわかる、ルーミアだな」

雅「確か能力は闇を操るんだったな・・・やっかいな」

誠「でも輪郭でも場所は見えるしそうやっかいでは無いんじゃ・・・」

雅「いや闇に囲まれてるって所が危ないんだ、もしも潰されたらどうする？」

誠「オワタな・・・」

雅「とりあえず脱出して逃げるしk「ゴチャゴチャうるさいわよ」グッ！！！」

雅人は不意の攻撃をくらって吹っ飛ばされる、誠は気持ちを集中させて閃光玉を取り出した。

誠「雅人！目を！これでも食らえ！！！」

閃光玉が光る・・・と思ったが光らない、イメージ不足か？

雅「違う！闇でかき消したんだ！！」

誠「な、なんだってー！！！」

さすが妖怪、戦いなれてる。それにくらべてこっちは戦い方がわからん。

雅「走るぞ！！」

誠「おう！！」

雅人と一緒に走る、俺の脚の速さなら逃げれる筈だ。

ドン！！と誰かにぶつかった

誠「あ、すみませ・・・ルーミア！？」

いつの間にか回り込まれていたようだ。

ル「そこにいたのかー・・・なんで名前知ってるんだー？」

・・・もしかして自分の操る闇なのにそのせいで俺らが見えてないんじゃ・・・

ルーミアは弾幕を飛ばしてくる、俺が見る限り全然かわせる範囲だった・・・が

誠「あっぶね！！」

間一髪だったがかわす俺、少しずつ速度が速くなるものだな・・・
そんなのルーミア撃ってきたっけ？
雅「おい能力でなんか出せ！！」
誠「なにだせばいいんだよ！！」
雅「とりあえず武器になるものだ！！」
誠「武器・・・」ポン
武器と念じたら日本刀が出てきた。
雅「なんで近距離武器だすんだよ！ライフルとかマシンガンとかあるだろ！！！」
誠「銃は反動が重いからダメだ、あと雅人、俺の剣技舐めるなよ！！」
誠はルーミアとの間合い、１０ｍを一瞬で詰め、尋常じゃない速さで切りかかる。
ル「危ない～」
ルーミアは間一髪かわし間合いを取る。
雅「・・・全く見えなかった・・・」
誠「身体能力が増加してるからといって速すぎるだろ・・・制御するのでいっぱいいっぱいなんだが」

ル「そりゃ～」

今度はさっきよりも厚い弾幕を飛ばしてくるこれをさっきのスピードを生かしてかわす。

２Ｄが３Ｄになると奥行きが増えるのでそれに応じて弾が増える、だからといって増えすぎだろう・・・

雅「・・・行くぞ！」

誠「おう！」

ル「まって～」

さっきとは段違いの逃走スピードですぐに見失ってしまった。

ル「・・・ごちそう・・・」

第四話・空中（後書き）

作「いや～間に合った間に合った！」

誠「・・・おい作者？悪夢ってどんな夢見たんだ？」

作「ん？青鬼に自宅と学校が合わさったようなとこで追われたんだ、しかも友達まで青鬼になるし最後ＢＡＤＥＮＤだし・・・」

雅「つ線香」

作「いや俺まだ死んでないよ？ホントだよ？実際小説書いてるじゃん」

誠「南無」

作「お前らひどすぎるよぉ・・・」

雅「ではまた次回！」

第五話・空腹（前書き）

どうも、学校が始まって憂鬱な日々が続く作者です。
毎回思うんだけど二人とも能力がチートな気がするんですよ・・・
それって転生ものの小説でよくあるけど戦闘シーンがド派手で表現難しいと思うんですよ！
それを表現する人達ってすげぇとか思っちゃう作者でした。

では四話始まり始まり～

第五話・空腹

誠・雅「どうしてこうなった・・・」

今の場所の説明を簡単にしてみよう・・・牢獄である。
牢は金属だと思われる素材を使われていて広さは大体2畳ぐらいのスペースである。
その中に二人は縄で縛られて一緒に入れられているというわけだ。

誠「えー読者の皆様には理由がわからなそうなのでちょいと過去を振り返ってみましょう」

雅「誠？そっちは壁だぞ？誰に向かって話してるんだ？」

誠「大丈夫、キミには見えないだろ？心優しくないと見えないんだよ！」

雅「（だめだコイツ・・・早くなんとかしないと・・・）」

誠「回想モードオン！」

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

雅「・・・腹減った・・・」

先程のルーミアとの戦闘から逃げだして一分後、雅人は空腹で倒れた・・・と言うより寝転がった。

誠「なにしてんだよ！ルーミアに追いつかれたらどうすんだよ！！」

雅「大丈夫だよ、だって誠・・・時速何キロで走ってたと思う？あれは公道で走ったら逮捕されそうな速さだったぜ」

誠「ボルトもびっくりってか？」

雅「そうそう・・・あ、ハチミツ拾ってこ・・・」

誠「なにさりげなくモン〇ンやってんの？てか思ったけど伏字いらなくね？」

雅「そうだな～伏字いらない気がする、じゃあ今のうちに伏せ字しないといけない奴でも言いまくってみようか
（バヒューン）とか（ピーーー）とか（デッドスパイク！）とかさ」

誠「ちょｗｗ放送禁止用語言ってんじゃねぇｗｗｗそして作者文字を伏せるのはいいけどデッドスパイクは違うゲームだろｗｗｗｗ」

雅「今作者がドハマりなゲームである」

誠「ここまでメタ発言、そして俺もハマっているＢＬＡＺＢＬＵＥ」

雅「誠がゲーセンにあるアーケード版のを出せば対戦可・・・電気なくね？」

誠「じゃじゃーん！自家発電機～（某青ダヌキ風」

雅「ホント便利だなお前の能力・・・それに比べ俺なんか知らないうちにＭＰ０になってるし・・・」

誠「とりあえず休憩終わったら地図でもだして町まで行こうぜ」

雅「おｋ・・・あ、紅玉キタアアアアアアアアアア！！」

誠「レウスの紅玉なら大量にありますが何か？」

雅「お前に物欲センサーは働かないのか？」

誠「いや、今まで一度も逆鱗がこないんだ・・・もう何頭レイアがお陀仏した事か・・・」

雅「そっちか・・・」

そんなこんなであっと言う間に時間は流れ・・・

誠「えーみなさん、１０時です！ゆっくりお休みください！」

雅「・・・なあなあ、なんで夜１０時までゲームしてたん俺達？」

誠「だって休んでたら木の実がなっているのを見つけて食ったら満

腹になってゲームしまくろう！って言ったのは」

雅「俺だが何か？」

誠「・・・まあいいか、ここでテントを（ポン）張って寝て明日にでも移動しようか」

雅人「・・・夜にここで寝てたら妖怪がくるかもしれないから移動を始めようぜ・・・」

誠「へ？何だって？」

雅「人がせっかく話を始めたのにテントと結界張らないでｗｗｗ」

誠「おやすみー」

雅「人の話を聞いてよ～ｗｗｗｗｗ」

誠「ｚｚｚ」

雅「寝ｗてｗるｗしｗｗｗｗｗｗｗｗ」

壮大にずっこける雅人、それでも微動だにしない誠。

雅「・・・俺も寝よ・・・ｚｚｚ」

色々あった疲れも相まってすぐに寝てしまった二人・・・でも、

それがいけなかった

朝、誠はテントの中で眠い目をこすりながら起きた。
とりあえず能力で水（ほぼ海水）を出し、顔を洗って回りを見た。
誠「さすがに結界張ったからテントは異常なしっと・・・」
雅人が寝ているのをまたいでテントから出た、すると・・・
誠「・・・誰？」
そこには結界の外でこちらをずっと見ている人達がいた。
？「やっと出てきたな！結界を外しこちらにこい！！」
・・・見知らぬ人達であった。
顔も知らないし名前も知らない、そんな見知らぬ人が3人いた。
誠「・・・あんたら妖怪？」
雅「なに！？妖怪！？どこだ！？」
誠「雅人・・・少し黙ろうか」
？「我々は近くの村の住人だ、怪しい者がいるからと言う報告で来たら結界を張ったお前らがいた、だから少し調べさせてもらう！」
誠「どうやら人間らしいよ？」

雅「ならいいんじゃない？結界外してあげれば？」

誠「そうだな・・・よっ！」パリーン！

結界は音を立てて崩れ去った・・・

？「（ニヤッ！）よしかかれー！！「おー！」」

いつの間にか三人だった人達が増えている、大体１０人ぐらいに。

誠「ええええええ！？！？グッ・・・」

雅人「ちょ！？やめくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；・・・」

一瞬にして縄で縛られて手刀を入れられ気絶、二人ともそのままつれていかれてしまった・・・

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

誠「と言うわけです」

雅「いや～色々ありましたな～」

誠「どうやら俺達は山賊？みたいなのに捕まってしまったらしいんでここは山賊？の住処だと思う」

雅「説明乙」

誠「どうやって逃げる？俺の能力は手が使えないからダメだしあいにくナイフとかはポケットに無いし・・・」

雅「俺の能力は論外なわけね・・・ヒドス」

誠「戦闘力１のコケになにが出来る？」

雅「・・・ふっふっふっふっふ・・・」

不敵な笑みをこぼす雅人

誠「なん・・・だと・・・スカウターで測定不能だと・・・バカな！？こんな事があるものか！！！」

雅「俺がなんで昨日はＭＰ０だったか教えてやろう・・・それは腹が減っていたからだ！俺は腹の具合でＭＰが回復する仕様だっだんだよ！！」

誠「Ω　ΩΩ＜な、なんだってー！！」

さりげなく右手だけ縄から脱出してマネキンでボケる誠。

誠「バカな!?お前が起きたのは妖怪と聞いて飛び起きたときだろう!?飯を食う暇など」

雅「あったんだよ・・・」

誠「・・・ハッ、あの時・・・」

雅「そう、お前が俺をまたいでテントから出た時、お前は俺の左手の小指を踏んでいった・・・そして俺は痛みをこらえてぶん殴ろうとしたら腹が減ってきた、だから昨日蓄えた飯を食って出ようとしたら妖怪とお前が言ったから出てきたんだよ・・・顔も洗わずにな!!」

誠「・・・顔洗う用に水置いといただろ・・・」

雅「間違って蹴ってこぼしちゃった、テヘペロ☆」

誠「・・・」

雅「さて脱出しようか、脱出と言ったらメタルギアのスネークが独房から脱出するミッションあったな」

誠「ああＰＳＰの新作、ピースウォーカーにあったな」

雅「お前それしかやった事無いだろ、まあそれだが」

誠「で、俺が手伝う事は？」

雅「とりあえず俺から５ｍはなれて、危ないから」

誠「おk」

誠はその場から横に倒れ転がり、壁まで離れた。

雅「うーん・・・この縄なら切るより燃やすほうが速そうだな、メラメラの実！！」

そうつぶやいた瞬間、雅人の体は炎に包まれ、縄が一瞬で燃えつきた。

雅「・・・え！？これがＭＰたったの５！？全然使えるじゃん！！

誠！見た！？凄くな・・・」

雅人は嬉しそうに振り返るとそこにはチリチリの髪の毛に真っ黒な顔になった誠がいた。

雅「・・・お、俺はちゃんと離れろと言ったのに「この二畳あるかないかのスペースであんな大火力使ってんじゃねぇ！！！」・・・はいサーセン」

誠は、はぁ・・・と溜め息をつき、ふと疑問を口にした。

誠「・・・ちなみにあとＭＰはいくらぐらいある？」

雅「・・・９９５」

誠「パネェ」

雅「んじゃお前のも」ボッ！

誠「ちょ！！やめろそれはこれ以上燃えたkあちちちち近寄んな熱い！！」

雅人「あ、スマン、じゃあ・・・スパスパの実」ジャキンッ！

雅人がつぶやくと同時に腕から刃物勢い良く伸びてきた。

誠「あっぶなッ！前髪が切れる所だったろうが！！」

雅人は誠が言う文句を全く聞かずに縄を切る。

雅「・・・スパスパも結構強い部類に入る筈なんだがＭＰ４って・・・」

誠「・・・お前は刀とかいらなくていいな、俺は能力を具現化するのは結構疲れるから苦手なんだよ」

雅「でも武器は作るの簡単だろ？せっかくだし俺にあれを作って欲しいな～」

誠「・・・あれ？何それ？」

雅「あれだよ！日常のちゃんみおが付けてるウッドキューブ！」

誠「ダメ」

雅「（、・・ω・、）ショボーン」

誠「だって俺日常あんま知らないし」

雅「頼んだ俺がバカだった」

そう言って牢をぶち壊す雅人、そしてぞろぞろやってくる山賊。

山賊A「逃げようとしても無駄だぞ！この数を相手出来ると思うな！！」

山賊B「そうだそうだー」

山賊C「諦めて降伏したほうが身の為だぞー！」

誠「子供かあんたらｗｗｗ」

雅「もう少し大人な発言したほうがいいなｗｗｗ」

誠「・・・さて、いっちょやりますかッ！！」

雅「レッツ、パーリィ！！！・・・の前に・・・世界（ザ・ワールド）！！時は止まる・・・」

雅「えー読者の皆さん、次回へ続きますです。では（＊、ω、＊）ノシ」

誠「だがその顔文字は流行らない」

第五話・空腹（後書き）

作「ここで思う人は思うこの小説の矛盾点ー！」

誠・雅「イェー！パチパチパチパチパチパチパチパチ！！」

作「では逝ってみよう！」

Q世界（ザ・ワールド）とか強力なのは使えないんじゃ・・・

A神もとい作者権限で今回はおｋにしましたが戦闘で使うことはありません。

Qザ・ワールド中になぜ誠が発言出来たし

A神もとい作者権限で（ｒｙ

Q右手を脱出させてんだったらボケてないでナイフでも出せよｗｗｗ

A誠から見れば命＜ボケです。

Q回想なげーんだよダメ作者

A誠は少し黙ってください

作「ではまたお会いしましょう！さようなら！」

第六話・閃光（前書き）

小説の更新ペースをあげよう！

・・・あげたい・・・

まあそんな感じで逝ってみよう！

第六話・閃光

誠「せいっ！！」ウボアー！！！

雅「はっ！！」ギャアアム！！！

どこぞのラスボスのような断末魔を上げて山賊達が倒れていく、もう３０人は倒した筈だ。
それなのにゴキブリのように沸いてくる山賊達を誠と雅人は能力をフルに使い倒していく。

誠「クソッ！！何人いやがるんだこの山賊はッ！！！」ぐふっ・・・・

雅「このままじゃ全員倒す前に俺のＭＰがなくなっちまう！」ぬわーーっっ！！

山賊達は能力が無いらしく力で倒そうとやってくる、それをかわして一撃で倒せたとしてもまた山賊が現れる。この無限ループのせいでスタミナが尽き、また縛られるのは流石にごめんだった。

誠「無限ループって怖くね？」あべし！！

雅「ボケてる暇があったら策を考えろ！！」イ゛ェアアアア！！

誠は能力で刀を出し敵をヒット＆アウェイで倒していく、雅人は能力で火炎を身にまとい敵を燃やしていく。但し敵は切りつけても血は出ず、燃やしても灰にならず、倒れたものは光になって消えていく。おかげで人の中身を見ずに済む、戦闘中にそんな物を見て吐いてる間に捕まる心配もいらないようだ。

誠「・・・だいぶ倒したがまだいるのか・・・」ひでぶ！！

雅「だがもう一息のようだ、見ろ！」ぎにゃぁぁぁぁ！！

雅人は真っ赤に燃えている手で誠の後ろを指差す、そこには山賊のリーダーらしき大男が立っていた。

雅「あいつを倒せば俺たちの勝ちだ、いくぞっ！」

雅人が一気に大男の所へ駆け抜ける、誠は全力で周りの手下を倒していく。

雅「もらったあああああああああっ！！」

雅人がそう叫んだその時、誠の脳裏に電流が走った！！

誠「駄目だ！！それはフラグだ避けろ！！」

シュ！！

そこに一筋の閃光が走った。

雅「・・・へ？うおッ！！」

雅人は殴りかかる寸前に間一髪体を捻って閃光を回避する。

だが体制が崩れた雅人は受身を取りながらも地面に叩きつけられる。

誠「雅人！！（シュ！！）うわっ！！」キンッ！！

雅人の所へ駆け出した誠を閃光が邪魔をする、それを能力を使って出した盾でガードする。そして閃光に向かってナイフを投げる、それを閃光が打ち落とす。打ち落とされたナイフはそのまま地面に突き刺さり消えていく。

辺りが一斉に静かになった、手下の山賊達も後ろに下がって襲ってこない。

雅「いってってって・・・クソッ！誰だお前は！！」

雅人は肩をさすりながら閃光に向かって殺気を出す、閃光は無言で雅人の所へ走る。

雅「無視してんじゃねぇぞ！！うぉりゃあああああ！！！」

走る閃光に向かって雅人は走り出す、お互いがギリギリまで距離を詰め、相手に攻撃する。

キンッ！！！

甲高い音・・・金属と金属がぶつかる音の後、二人の人影がつばぜり合いをしていた。

一人はもちろん雅人、能力・・・スパスパの実で腕から刃を出し相手に切りかかっている。

もう一人は雅人と同じ位の身長・・・いや、少し小さい位の身長の人だった。

顔はフードの様な物の影で見えない、青のジャージの様な服にフー

ドを付けたような姿をしていた。そしてその両手には短剣が握られ、腕を十字にするような感じで雅人の刃を受け止めていた。
数秒互いににらみ合い、そして一斉に後ろへ飛んで距離を取る。

雅「・・・速いなお前・・・」

？「・・・・」

・・・無言・・・

ただ無言で閃光は雅人を睨む、その瞳は獲物を駆る獣の様に鋭い。

誠「・・・雅人、手ぇ貸そうか？」

雅「いやいい、お前は頭（カシラ）でもぶっ倒しておいてくれ」

誠「オッケー・・・・・・・やられるなよ？」

雅「お前もな！！」シュッ！！

一気に雅人が閃光の方に飛ぶ、そしてそのまま切りかかる。
それを見切ったのか閃光は刃を受け流し切りかかる、だが雅人は足から刃を出し防ぐ。
そしてまた二人とも離れ、にらみ合う。

？「・・・・」

雅人「・・・少しはしゃべったらどうだい？っとお構いなしかッ！！」キンッ！！

閃光は短剣を巧みに使いラッシュをかける、それを雅人は両腕の刃で受け止めはじき返す。

雅「・・・そろそろ終わりにしようか・・・」

そう言うと雅人は体中から刃を出す、その数は２０を超えているだろう。

雅「・・・行くぜ！！」

雅人は一気に踏み出し、そして左腕で切りかかる。閃光はそれを左手の短剣で払う。
そこに右腕の刃で切りかかり閃光はとっさに右手の短剣で払う。

雅「まだだッ！！」

右腕が払われると同時に体を回転して顔に左足で回し蹴りを入れる、閃光は驚きながらも体を捻り回避する。
そこに雅人が右腕の刃をしまい、炎をまとった右腕で殴りかかった。

？「ッ！！しまっ・・・」

雅「終わりだあああああああ！！」

閃光は回避しようとするがもう遅い、雅人の右腕は閃光の腹に直撃していた。

？「グッ！！・・・」

そのまま閃光は後ろに飛んでいく、ぞして硬い地面に叩きつけられ

気絶した。

雅「・・・うおっしゃ！！」

雅人は思わずガッツポーズを取る。そして誠の方を見た。

雅「・・・あいつもそろそろだな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

誠「よくも俺らを捕まえてくれたなぁデカブツ・・・」

誠は山賊の頭(カシラ)を睨みつける。

誠「人がせっかく結界壊して出たら捕まえるったぁ卑怯過ぎやしねぇか？」

頭(カシラ)「へっ！それが山賊のやり方よ！んな事で怒っちゃ世の中生きていけねぇぜ？」

誠「ふん・・・山賊の頭(カシラ)は頭が腐ってやがるな・・・これじゃあ仕方ねぇか」

頭(カシラ)「んだと小僧・・・調子に乗りやがって・・・その減らず口を黙らせてやろうかオイ？」

誠「あいにく俺はお前みたいな野郎に触られるのも嫌いでね、お断りさせてもらう」

頭(カシラ)「・・・死にてぇみたいだなぁ小僧・・・」

この一言で頭(カシラ)はとうとうキレる、そして頭(カシラ)は後ろに置いてあった棍棒を掴み、振りかぶる。

誠「はいはい強そうですねワロスワロス・・・でもなぁ」シュッ・・・

頭(カシラ)「なに!?ぐおッ!!!!」

誠の姿が突然消える、そして山賊の頭(カシラ)の背中に衝撃が走り盛大に吹っ飛ぶ。

誠「・・・おせぇんだよ・・・」

誠が静かに呟く、そして頭(カシラ)は受身を取って着地し、立ち上がる。

頭(カシラ)「・・・やるようだな・・・しかしどうやって背後に回った・・・?」

誠「縮地法って知ってるか?」

吹っ飛んでかなりの距離が開いたにも関わらず、速攻で山賊の頭(カシラ)の所に誠が移動する。

頭(カシラ)「なっ!いつの間に!?」

誠「見えねぇんか・・・じゃあバイならだな」

誠は能力で杖を出す、無駄な装飾が一切無い樫(かしのき)の木で出来た杖である。

誠「我、求める。全てを凍結させ、無へと帰す力を・・・」

誠は呪文のようなものを唱えていく、その姿は隙だらけだった。

頭(カシラ)「・・・隙だらけだ！！」

山賊の頭(カシラ)は物凄いスピードで棍棒を振る、直撃したら誠の頭なんぞ一瞬で潰れるだろう。

頭(カシラ)「死ねぃ！！」

誠に棍棒が振るわれる、棍棒は土煙を上げて地面に叩きつけられる。土煙が消えたそこには誠の姿はなく、小さなクレーターの出来た地面だけが残っていた。

頭(カシラ)「・・・！？バカなっ！？」

誠「氷神よ、我が力となり全てを凍結させろ・・・」

一瞬で山賊の頭(カシラ)の頭上に飛んだ誠が呪文を唱え終わる・・・
そして誠の口から放たれた言葉が終わると同時に山賊の頭(カシラ)の周りに冷機が漂う・・・

誠「食らえ・・・エターナルフォースブリザードッ！！！」

頭(カシラ)「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！」

誠「・・・終わりだ、死なない程度に調整しておいたのを感謝しな・・・」

誠が着地したのと同時に山賊の頭(カシラ)は完全に凍結した、その姿はまるで氷の彫像のように美しかった。

誠「・・・ふぃー・・・終わった終わった！！」

誠は軽く伸びをしてその場に座り込む、そこに雅人がやってきた。

雅「・・・終わったな！」

誠「そうだな、んじゃ行こうか！」

雅「ああ！」

誠達は歩き出すその顔はやり遂げたと言う気持ちでいっぱいだった。

？「待ってください！！」

・・・後ろから不意に声がかかる、驚いて振り向くとそこには雅人が倒した閃光が立っていた。

雅「・・・なんだ？まだやるか？」

雅人は身構える、それを誠が止めて声をかける。

誠「・・・で？用件は？」

閃光は無言でフードを取る、すると辺りに花のような匂いが漂った。まず見えたのはオレンジ、フードを取るとオレンジ色の髪がなびいた。それを鬱陶しそうに顔を横に振って顔を出す。

誠・雅「お・・・女!?」

そう、そこには美しい大人の顔立ちを持ちながらも子供っぽさも残る女性の顔があった。
オレンジのロングヘヤー、それをポケットから出したリボンのような物でポニーテイルに結んだ。

?「私の名前は蜜柑(ミカン)って言います以後、お見知りおきを」

そう言って小さくお辞儀をする。

誠「・・・へ?あ、ああ・・・蜜柑さんね、おk把握した」

雅「あ、俺は山田　雅人、こっちは葉隠　誠って言う」

そう言って誠を指さす雅人。

蜜「・・・雅人・・・誠・・・ハイわかりました。あと蜜柑　さんは余計です、さん付けは嫌いなんです、えっと、本題に入りますね」

誠「なんだぃ?」

蜜「あなた達は旅をしているんですか?」

雅「ああ、とりあえず街にでも行こうかって感じだな」

蜜「なら・・・私もその旅に同行してもいいですか？」

誠「・・・へ？なんで？」

蜜「私も旅をしている所に山賊に襲われたんです、それを返り討ちにしたら用心棒として雇われたんです」

誠「ｆｍｆｍ（フムフム）、じゃあ山賊が壊滅したからまた旅を再開しようと思ったら俺らが旅人だし同行しようと思ったってわけ？」

蜜「んー・・・まあそんな感じです。仕事がないと生きていけませんし」

雅「いいぜ！もう敵意もないようだし人は多い方が楽しいしな！」

誠「おいおいそんな理由で・・・まあ俺も賛成だな」

蜜「ありがとうございます！」

誠「んじゃぁよろしくな蜜柑！」

雅「よろしくだぜ蜜柑！」

蜜「よろしくです！」

新たに仲間が加わり、嬉しい気分で山賊のアジトから出て行く誠達

だった・・・・

第六話・閃光（後書き）

作「・・・なんか凄く疲れた」

誠「・・・なんか凄く楽しかった」

雅「・・・なんか凄く活躍できた」

蜜「・・・なんか凄く名前があれだった」

作「・・・すまんね俺のネーミングセンスじゃそれが限界であった」

蜜「それにしても蜜柑って・・・」

誠「いいじゃんかわいいし俺蜜柑好きだし」

雅「誠が作者のフォロー！？天変地異がおきるなこりゃ」

誠「言いすぎだろそれ」

雅「スマソ、じゃあそろそろ終わるか」

作「ではまた次回！！」

第七話・逆転（前書き）

三日に一回ぐらいのペースで更新する？
いやそれだとキツイ。ならば・・・

最低でも一週間に一回、これならいける！
ということで第七話でーす！

第七話・逆転

誠「えーここで一つ皆様にご報告があります、あ、読者様にじゃないよ！」

早朝、誠と雅人は今、食事を終えた所だ。蜜柑は食べ始めが遅かったためいまだ食事中である、そして食事を終えてすぐに誠が立ち上がりかしこまりながら言った。

雅「そっちは崖だぞ誠・・・で、なんだ？」

蜜「なんですかモグモグ食事中なんですから素早くお願いしモグモグ・・・」

誠「・・・うん、とりあえず一旦食事をやめようか」

少し呆れながらも蜜柑を注意する。

蜜「（ゴクンッ！！）・・・で、なんですか？」

誠「・・・食料が切れました」

雅「・・・はっ？」

蜜「・・・へっ？」

誠「・・・・・・食料が切れました」

雅「大事な事なんで二回言いましたってか？」

誠「ええ」

誠達は昨日山賊のアジトから出る時に食料をごっそり貰って言ったのだがその全てが無くなっていた、大体一ヶ月は持つほどの量を昨日の夜分と今、もとい朝飯分で食べきってしまったのだ。

蜜「・・・ちょっ！ヤバイじゃないですか！なんで山賊の食料盗んで来たのにこんなに早く無くなるんですか！？誠さんも雅人さんも食べすぎなんですよあの量なら保存状態が良ければ一ヶ月はもったのに二人とも食いすぎなんですよホントよくそんな食い意地張って今まで旅が出来ましたね！ホント、私が食べ物の管理をしてたらもっと、最低でも3週間は持ったはずですよそれなのに盗んで次の日に全て無くなるなんておかしすぎですよもう！こんなことならこの二人についてこなければ良かった・・・一人ですぐに近くの村に行ってれば食料も買えたし服も変えるし気持ちいいお布団で寝れるし全然よかった・・・なのに何でこの二人についてきてしまったんでしょうかクドクドクドクド・・・」

誠「なぜ飛ばしたし」

雅「全文読む人は少ないだろうなぁ」

実は雅人が心の中で何故に噛まないんだろうとか思ってたり思ってたり。

蜜「ちょっと聞いてるんですか！？大体貴方たちが食い意地張ってるからこういう事になったって言うのに人のお説教ぐらい聞きなさいよねホントにもうこれだから男はｄ「異議ありッ！！！」・・・はっ？」

驚きの声が口からこぼれる蜜柑、そして叫んだ本人はどこぞのツンツン頭の弁護士のように蜜柑に指を突きつけていた。

誠「・・・この際だからハッキリ言わせてもらおう、今回の食料あぼん事件の犯人を・・・」

どうして事件の名前がここまで変になったんだろうとか呟く正常な人はここにはおらず、誠は雅人にアイコンタクトを送り雅人も準備をする。

雅「まさか弁護士！犯人が解ったと言うのですか！？ならば聞きましょう、今回の食料あぼん事件の犯人の名前とその証拠品を！」

誠「ふっふっふ・・・いいでしょう裁判長、まずはこれを御覧ください裁判長」

と、懐から一枚の紙切れを取り出す。

雅「・・・これは・・・写真ですかな？私達三人の食事風景ですな」

そう昨日の夜、三人での初食事記念にと誠が撮った写真だ。写真の手前に誠の分の食べ物、右に蜜柑左に雅人と写っている。

誠「では裁判長、この写真に移る俺達三人の手元にある皿を見てください」

雅「・・・凄い量の皿ですな、一二三四・・・とても数えきれませんねぇ」

呆れた顔で写真を見る、三人ともかなりの量を食べたので皿が大量に積み重なっている。

誠「・・・では皿の数が一番多いのは誰ですか？」

誠が質問を飛ばす、ほっほっほと笑う雅人

雅「それはもちろん何杯も食べていた弁護ｓ・・・あああああああ！！！」

いきなりの絶叫にビックリする蜜柑を無視して誠は話を続ける。

誠「もうお分かりでしょう・・・蜜柑の皿はざっと俺の3～4倍ある事が・・・」

蜜「・・・」

誠「・・・犯人は蜜柑・・・あなただ」

ビッ！！っと指を蜜柑の方に突きつける誠。

蜜「・・・ふぅ、わたしの負けですね・・・」

溜め息と微笑をしながら罪を認める蜜柑・・・そして誠は最後の疑問をぶつける。

誠「どうしてこんなに食べてしまったんだい？あなたは女性だ、こんな食生活では太ってしまう、それなのにどうして・・・」

蜜「・・・簡単よ・・・私は食べても太らない体質なのよ」

これを世の中の女性が聞いたら羨ましがるだろう、そんなことを思った。

誠「・・・なるほどわかりました」

蜜柑は誠にはかなわないわねと呟きながら歯を磨きに行く。

雅「・・・では被告人誠への判決を言い渡します」

裁判長、もとい雅人が木槌（誠作）を持ちながら静かに言う・・・緊張しながらも雅人の事を真っ直ぐと見つめる。そして小さく返事をした・・・

誠「・・・はい」

よろしい、と雅人が呟く。

雅「・・・被告人誠を・・・」

誠「・・・ゴクン」

周りが一気に静まり返った、それは時が止まったようにも感じられた、一秒が長く感じる、緊張の糸は全くほぐれない、そして静かに雅人が口を開く・・・

雅「　有　罪　と処する」

誠「・・・ほへっ？」

素っ頓狂な声を出して肩の力が抜けていく誠、少しの間雅人の放った言葉が理解できず視線が宙を舞い、やがて正気を取り戻した誠が最大級の疑問をぶつける。

誠「なんでですか！！俺の濡れ衣は取れたはずでしょう！？だのにどうして！？！？」

困惑気味の誠を遠目で見ながら歯磨きをする蜜柑。

雅「ええ、確かにその件は晴れましたがまだ一つ罪が残っているでしょう？」

誠「・・・へ？」

まてよ・・・なんの事だかさっぱりわからん・・・と頭の中を整理して探し回る誠

雅「・・・少し近くに来なさい被告人・・・」

誠「？」

わけもわからず近づく誠そこに雅人の木槌（誠作）が勢い良く振るわれる、そして脳天にクリーンヒットして地面にうずくまる誠をジ

ト目で見ながら雅人が怒鳴る

雅「お前昨日の朝俺の小指踏んづけて言ったの忘れてたなッ！！！」

誠「マコトニスミマセンデシタホントウニハンセイシテイマス」

超が付くほどの棒読みに呆れる雅人

雅「・・・もういい、歯磨きしねぇと」

誠「あ、まってー」

走る雅人を追いかける誠、それを何が何やらとか呟く歯磨きを終えた蜜柑なのであった。

第七話・逆転（後書き）

作「・・・何この駄文」

誠「完全に逆転裁判だなこれ」

雅「ネタわかんない人はつまらんだろうな」

蜜「ええわかりませんね」

作「・・・正直スマンかった」

誠「えー今回から文の構成が少し変わっております、分かる人はわかる、偉い人にはわからないのだよ！！」

作「・・・その元ネタなんだっけ？」

誠「忘れた（＾ｑ＾）」

作「・・・ではまた次回にお会いしましょう！さようなら！！」

第八話・睡眠（前書き）

昨日、もとい１０月１０日はこのダメ作者の誕生日でしたので更新が遅れてしまいましたすみません・・・

では第八話です。

第八話・睡眠

空を見上げると雲が浮かんでいる。
地面を見下ろすと風で草がなびいている。
いい天気だな・・・と少年・・・雅人は小さく呟く。
日の光は暖かく、気を抜けば眠ってしまいそうだった。
心地よい風が髪を撫でる・・・それと同時に眠気が雅人の頭の中を埋めていく。
眠気に満ちた目をゆっくりと閉じて眠ろうとする、意識がゆっくりとぼやけて沈んでいく。
沈み行く意識の中でも自分の耳は周りの音を拾う、話し声が聞こえるがそんな事はどうでもいい。
意識は沈む、深く、深く、まるで海底に沈むように。
足音が聞こえる、足音はゆっくりとこちらに近づいてくる、おや？と思った頃には遅かった。
自分の腹に強烈な衝撃が走る、衝撃は電流のように全身を駆け抜け沈んだ意識が一気に腹の痛みと共に浮かんでくる。
眠気が一気に覚めて起き上がり周りを見渡すとそこには見慣れた少女がこちらを見下ろしている。

蜜「おはようございます雅人さん！よく眠っていたようなので踵落(かかと)としを一つ入れさせて頂きました！」

雅「なんか違う！いや絶対違う！そこにっこりしながら言う言葉じゃないよね普通！？」

蜜「ええそうですね」

雅「即答！？」

雅人の腹に踵落(かかとおとし)としを入れた張本人の少女・・・蜜柑はにっこりと笑い雅人を見下ろす。
自分のお腹をさすりながらゆっくりと立ち上がった雅人は一つの疑問を抱いた。

雅「あり？誠はどこいったん？」

そう、誠の姿が見えないのだ。先程の自分の記憶では誰かが話をしていた気がする、なのに周りには蜜柑ただ一人がいるだけだった。

蜜「誠さんならいますよ？」

意味がわからない、右を見ても左を見ても誠の姿は影も形も見えない。

蜜「どこ見てるんですか？上ですよ上！」

と蜜柑が雅人の頭上を指差す、つられて上を見ると誠が木の上で昼寝をしていた。
能力で出したと思われる巨大なハンモックを木にくくりつけてすやすやと寝ている。

蜜「そろそろ交代の時間ですよ雅人さん、私も早く寝たいんですから・・・」

ふわ～・・・とあくびをして木陰に入る蜜柑、それを見て止まっていた思考回路がゆっくりと動き出す。
そうだ思い出した、近くの村まで行く途中にいい天気だから昼寝しようと誠が提案したから一時間毎に一人が見張りをして残りは昼寝

しようって感じだったっけ。

雅「・・・もう二時間経ったのか・・・」

まず最初に提案した誠が見張りをして次に蜜柑、最後に俺という流れだったのだがもう時間になったのか。

雅「・・・ゲームしすぎて寝ようとした時に交代とは・・・眠い・・・」

雅人はゲームを最初にやって疲れたら寝ようとしたのだがやりこみ過ぎて5分と寝れなかった。

チッ・・・と舌打ちしながら木陰を出て誠が創った簡易見張り台に登る。

雅人は自分のＭＰを確認する、４００近くあるから山賊にでも奇襲されても大丈夫だろう。

見張り台の中央にドラゴンレ・・・生物レーダーが置いてある、これで半径３００ｍ以内の生物（植物や虫は除く）を見ることが出来るらしい。

今レーダーに映っているのは自分入れて４人、よし正常正j・・・あれ？

もう一回レーダーを見ると中心に一つ、すぐ近くに二つ、少し遠くに一つの反応がある。

雅「・・・まぁ良いか、こっちに来たら倒せばいいんだし・・・てか誠が結界張っとけばいいのに・・・」

そう言ってるうちにレーダーの反応が移動する、そして範囲内から出た。

雅「・・・ようしゲームしよっと。」

雅人は自分のＰＳＰを取り出すとゲームを始める、その後レーダーに新たな反応が出る事はなかった・・・

誠「うーん・・・むにゃむにゃ・・・」

気持ちよく惰眠（だみん）を貪（むさぼ）る誠・・・

ハンモックがゆらゆらと小さく揺れる・・・その揺れもまた気持ちよかった。

誠「・・・」ゴロン

寝返りをうつ誠、ハンモックの右端で右に寝返りをうった・・・

案の定そこには何も無く、その体は宙を舞う。

能力を使えるといえどそれは起きている時のみ、寝ている間はただの人間、重力には逆らう事が出来ずに体は地面へと落下を開始する・・・

・・・やあ、ようこそ。

ここは俺・・・誠の夢の中、つまり妄想空間ＤＡ☆

え？俺の体が落下中？なんの事だい？
さて、今俺は初めてのスカイダイビングに挑戦中なんだ。
いやー高いねー、東方の世界に投げ入れられた時を思い出すよ。
メガホン持ったおっさんに「そぉい！！」された時は死ぬかと思ったなぁ・・・
ん？俺の番が来たようだ、装備おｋ、パラシュートおｋ、飛ぶぞー！！

・・・実にいい気持ちだ、風を切ってる！って感じがするね！
おっと、そろそろパラシュートを開かなければな・・・
このレバーを引いて・・・えい！・・・あれ？
開かないなぁ・・・えい！えい！
・・・あれれー？おかしいなー？

・・・ヤバイ。
ヤバイ
・・・あ、もう地面が近・・・

誠「いだっ！！！」

凄まじい衝撃が脳天からつま先まで響く、どうやら頭から落ちたようだ。
だが流石（さすが）体を強化しただけある、尋常じゃない痛みとタンコブだけで済んだようだ・・・
目眩がする・・・頭を抑えながらも立ち上がり、二人の場所を確認する。
蜜柑は俺が落ちた事も気づいてないらしく、猫のように丸まって木陰で寝ている。
まあ知られたら凄く恥ずかしいから好都合なんだが。
雅人がいない、多分見張り台だろう。
誠は見張り台の方へ歩を進める、見張り台の上へと登ると雅人がゲームをしていた。

誠「・・・ちゃんと見張ってた？」

雅「うおっ！！・・・なんだ誠か、驚かさないでくれよ・・・」

誠「・・・ダメだこりゃ」

レーダーを見ると反応はない、そろそろ時間なので出発しないといけない。

誠「俺が寝てる間に反応なかったよな？」

雅「大丈夫だ、問題ない、一人通りかかった奴がいたがすぐに範囲外に出てったよ」

誠「・・・じゃあ行くか、蜜柑起こしてくるからこの見張り台壊しといてな」

そう言うと蜜柑の方へ走る誠。

雅「あ、おい！・・・行っちゃったよ・・・」

思わず溜め息が出る。

雅「・・・燃やしたら火事になるし・・・切るには重労働だし・・・」

ぶつぶつと方法を呟きまくる雅人、最終的にオラオラァ！！やら無駄無駄ァ！！して粉砕☆玉砕☆大喝采☆したそうな・・・

誠「・・・にしてもどうやって起こすか・・・」

蜜柑の寝ている前で考える誠、流石にセクハラと言われるのは控えたい。

誠「・・・あ！！」

ふと閃く誠、そして能力でフライパンとおたまを出す。

それを自分の頭上に構えて盛大に叩く。

カーンカーンカーンカーンカーン！！

起きろー出発するぞー！！

カーンカーンカーンｋ「うるさい！！」「ひでぶっ！！！」

蜜柑のスラリとした綺麗な足での回し蹴りが誠の顔に直撃して吹っ飛ぶ。

誠「・・・起きろごらあああああああああ「うるさいってば！！」あべしっ！！」

誠「準備できたかー？出発するぞー」

蜜「はーい！」

雅「おｋ・・・」

何故か頬が少し腫れている誠と何故か凄く上機嫌な蜜柑何故か凄くげっそりした雅人は歩き出す。

雅「・・・休んだ気が全くしないんだが・・・誠？その顔どうした

？」

誠「んなの気のせいだろ？顔？それも気のせいだ、問題ない」

雅「・・・お前も苦労したのな・・・」

誠「・・・ハァ・・・」

蜜「ほらほら！先は長いんですから早くいきましょう！じゃないと日が暮れますよ！」

雅「・・・ハァ・・・」

歩くペースが早い蜜柑を追いかけるように歩く誠と雅人・・・

誠はポケットから地図（誠作）を取り出してルートを確認する、すると近くに湖、そこを越えた先に村がある。

誠「やったね雅人！休みがふえるよ！」

雅「おいやめろ、え？どーゆー事？」

誠「すぐ近くに村があるぜ！そこで休めるって事だよ！」

蜜「本当ですか！やっと布団で寝れる・・・」

雅「よっしゃ行こうぜ！」

誠「おー！」

蜜「ハイです！」

先程の疲れもどこへやら、三人で上機嫌に走りだした・・・

？「あたいったら最強ね！！」

小さな影が動く、近くには氷漬けの蛙が数匹、そのうち数匹は氷ごと砕けて無残な姿になっている。

？「でも暇ね・・・誰かここを通らないかしら、そしたらいっぱい悪戯出来るのに」

影は子供のような小さい体、背中には氷の結晶に似た羽が六枚、服装は白のシャツの上に青いワンピース。
氷の羽がなければ普通の子供のような容姿だった。

？「そういえば近くに人間の村があったわね！そこで思いっきり悪戯しよ！こんな発想が出来るあたいったらホント最強ね！！」

るんるんと湖から出る影、だがその方角は村とは真逆だったのは言うまでもない・・・

第八話・睡眠（後書き）

作「そろそろ話を進めないと・・・」

雅「俺は平和だから結構いいけどなー」

誠「そうだよなー」

蜜「平和が一番ですよねー」

作「・・・お前らにはたっぷりと戦闘シーンという名のお仕置きを用意させてもらうから楽しみにしとけよ」

誠「作者の文才じゃあ俺はへこたれないなwwww」

雅「だなwwww」

蜜「そうなんですか、安心しました・・・」

作「・・・（、；ω；、）ブワッ」

雅「ほら作者、泣いてないで〆なって」

作「・・・次回をお楽しみにー・・・ブワッ」

第九話・馬鹿（前書き）

やっと原作キャラ2番目登場。

愛しの咲夜様を早く出したいなぁ・・・

今出したいすぐ出したいあっと言う間に出したい・・・

・・・では第九話ですｗｗｗ

第九話・馬鹿

雅「地図だともう少しで湖かな？」

地図を見るとあと１ｋｍぐらいで湖らしい、そしてそこを抜ければ村まですぐだ。

誠「よーし頑張って歩こー・・・」

・・・うん、すごくムカつく。

だって一人だけコナンボードだぜ？俺にも出して欲しいんだけど。

俺ら歩かなくても乗り物出せばよくない？車・・・は道が荒れてるからダメっぽいな。

まあいいか、一人だけ筋肉衰えて戦闘に出れなくなったりすればいいと思う、うん。

雅「・・・はぁ・・・」

誠「どーしたー雅人ー？元気だせ～」

雅「なら俺にも道具が欲しいぜ・・・」

誠「だが断る」

雅「・・・もういいです」

いいなぁ・・・俺も能力で飛ぼうかな・・・でもあれ疲れるんだよな・・・

蜜「雅人さん・・・前方から誰か近づいて来てます」
突然蜜柑から声がかかる、少し驚きながらも前方を見たがそこには何もいなかった。
雅「・・・？何も見えないけど？」
蜜「・・・来ます」
ヒュンッ！
風を切る音と共に氷柱(ツララ)が飛んでくる。それを顔だけ傾けて避けて飛んできた方角にナイフを投げる。
ナイフは飛ぶ途中で氷の塊になり、そのまま地面に落ちる。
誠はボードから降りて弓を出す、五本程矢を取り出しそれら全てを弓にかけて弦を引く、そして一気に矢を飛ばす。
その矢も途中で氷の塊になり、ナイフと同じように地面に落ちる。
・・・・・・・・・・
少しの間の静寂、それをかき消すようにまた氷柱(ツララ)が飛んでくる、今度は4～5本まとめて飛ばしてくる。
蜜柑は腰に付けたポーチから短剣を取り出して氷柱(ツララ)を切り落とす、流石は蜜柑、見事な早業だ。
？「フン！この攻撃を潰すなんてやるわね！でもまだまだ出せるんだから！！」
そう声が聞こえる、そしてまた氷柱(ツララ)が現れる、先程とは桁が違うねこれ・・・多分２０～３０本あるんじゃないかな？。

誠「おっし、ここは俺にまかせろ」

誠が先頭に躍り出て杖を取り出す、前に使っていた樫の杖ではなくて杖の先に紅玉が付いた杖だ。

誠「そっちが氷ならこっちは炎だ！！」

そう言うと杖の先が赤く輝く、そして杖を自分の頭上に掲げる。

誠「くらえ！！」

誠が杖を振り下ろすと杖から無数の炎がはじけ飛ぶ、炎はそのまま一直線に氷柱（ツララ）の所へ飛び、全ての氷柱（ツララ）を溶かす、そして水蒸気が舞い上がり虹がかかる。

雅「おおー！すげぇ！！」

蜜「うわ～キレイですね～」

誠「これがやりたくてやりたくてｗｗｗ」

三人の周りに和みムードが漂う、キレイだな～・・・

？「無視するなあああああああああああああああ！！」

やっと氷柱（ツララ）を出した張本人が現れた、・・・うん予想通りですた。

見た目は幼j・・・少女、はいそこ！フィーバーしてんじゃない！！

少女と言っても人間ではない、背中に生えた氷の羽で浮いている。

幻想卿には人間の他に妖怪とかも住んでいるんだけどこいつは妖精だ。
妖精って体が粉々になっても復活するとか誰か言ってたっけ。
？「この世界で最強のあたい、チルノ様を無視するなんていい度胸じゃない人間！！」
そう怒鳴ると幼j・・・チルノは弾幕・・・氷柱（ツララ）を大量に飛ばしてくる。
誠「ここで問題です・・・解ったら答えてね」ヒュンッ！
突然誠に声をかけられる、冷静に弾幕をかわす俺、切り落とす蜜柑。
雅「・・・お、おk・・・」
一応返事をしておく。
蜜「・・・」ヒュンッ！スパッ！！
蜜柑は氷柱（ツララ）を切るので精一杯のようだ。
誠「・・・問題、今俺は（ジュッ・・・）目の前にいる奴を見てどう思っている？」
飛んできた氷柱（ツララ）を杖を当てて溶かす誠。
雅「・・・（ヒュンッ！）感動・・・？いやお前はコイツで感動するわけ（ヒュンッ！）ないし・・・」

蜜「・・・」

誠「・・・わかるかな？」ジュッ！！

雅「・・・恐怖も違（ヒュンッ！）うだろ・・・だーッ！！わかんねぇ！！！答えは！？」

蜜「・・・」

考えるのがめんどくさいのでギブアップする、誠は何故だかわからんが勝ち誇った様な笑みを浮かべる。

誠「・・・正解は『かわ（ヒュンッ！）いい』です、いやーかわいいねホント、実物はやっぱ違うね！」ヒュンッ！

チ「だから強敵のあたいを無視して話こむなーーッ！！」

氷柱（ツララ）が増える、これはアイシクルフォールってレベルじゃねぇぞｗｗ

めんどくさいんでそろっと終わりにしようかと思う。

雅「燃え上がれ俺の体！！（物理的な意味で」

能力で雅人の体が燃え上がる、そのままチルノの方へダッシュする。

体に当たる氷柱（ツララ）は蒸発していき、踏んだ草は焦げていく・・・

誠「・・・山火事にならないかな・・・怖い」

蜜「なったらお願いしますね！」

誠「・・・ですよねー☆」

チ「熱い！！近寄らないでよ！！」

チルノが逃げ回るのを雅人はしつこく追いかける。

雅「ならもっと速く飛べばいいじゃないか」

チ「これが全速力なのに！？」

雅「あー・・・ご愁傷様です」

チ「くううううるうううなあああああああああああ！！！」

誠「・・・いつまで続くんだろうか・・・」

かれこれ1時間たった、二人は１０分毎に立ち止まり、終わったら走るを繰り返していた。

チ「ハァ・・・ハァ・・・あ・・・あたいの勝ちね！！」

雅「ハァ・・・ハァ・・・クソ・・・俺の方が遅かったか・・・ハァ・・・ハァ・・・」

誠「いつから徒競走になったんだオイ」

チ「ホントあたいったら最強ね！！流石あたい！！！」

誠「あー俺のツッコミはスルーかい・・・」

雅「ならばこれで勝負だ！四万二千五百七十五引く四万二千五百七十五はいくつだあああ！！」

誠「うわ、チルノに・・・もといバカに計算問題出しやがった・・・」

ちなみに答えはゼロ、それでも桁に悩まされて答えられないだろう、チルノなら。

雅「わかるまい！あと5秒だ！！」

チ「・・・答えはゼロ！！」

雅「ハーッハッハー・・・へッ？」

誠「なん・・・だと・・・！？」

チルノが・・・正解した・・・だと・・・！？

バカなありえん！？何故だ！！天変地異の前触れか！？どうしてチルノが正解出来たんだ！！

雅「ど・・・どうやってそんな速く計算を・・・！！」

チ「簡単よ、引き算なんてとりあえずゼロって言っとけば当たるのよ！！！」

誠「・・・・・・・・・」

蜜「・・・・・・・・・」

雅「・・・・・・・・・」

チ「やっぱりあたいったら本当に最強ね！！計算まで出来ちゃうなんて！！」

雅「・・・・・・・・・」

誠「・・・ドンマイ雅人」

雅「うわああ」

チルノとの対決で負けた雅人は今、チルノの肩揉みをしている。
ハイそこ、代われとか言ってんじゃない。
ちなみに俺と蜜柑は飯の準備、もちろんチルノの分もだ。
ふと俺はゲームでのチルノを思い出す、もしかしたらと思ったのだがありえるかもしれない。

誠「なあチルノー」

チ「なんでそんなにフレンドリーなのよ、何？」

誠「お前紅魔館への道わかんない？」

チ「紅魔館？確か・・・あっちね！！」

チルノが指さした道は俺らが通ってきた方角、つまり村と逆の方角だ。

誠「・・・って事は村を抜けてその先かー」

雅「おいおい逆だぞ！俺らが通ってきた道のほうだろ！」

誠「・・・チルノ、お前これからどこへ行こうとしてるんだ？」

チ「近くの村だよー」

誠「・・・な？」

雅「・・・おk把握した・・・」

まあこんなんだろうと思ったよ。

蜜「ご飯出来ましたよー！」

誠・チ・雅「はーい！」

雅「あ、それ俺が食おうとした肉！！」

チ「敗者は魚でも食べてなさい！！」

誠「すっかり下に見られてるな雅人」

雅「チックショオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！」

蜜「食事中は静かにしましょうね雅人さん」

チ「怒られてやんのーｗｗｗｗ」

雅「うううぅぅぅぅ・・・」

そのままチルノと一緒にテントで寝た誠達だった・・・

第九話・馬鹿（後書き）

作「って事でチルノ戦でしたー」

蜜「・・・私の出番少ない・・・・」

誠「今回は雅人が目立ってるなー」

雅「悪い意味でね・・・ハァ・・・・」

作「雅人は犠牲になったのだ・・・・」

雅「所でさ、息切れしてる時のハァハァは大丈夫だよね？セーフだよね？」

誠「雅人ロリコン疑惑浮上しましたー」

チ「やーいロリコンロリコン！！」

蜜「ロリコンはいけないと思います！」

雅「・・・ホント今日の俺不幸だ・・・・」

作「ではまた次回にお会いしましょう！さよーなら！！」

第十話・道中（前書き）

未来日記・・・面白いなーwww

ネタが思いつかないけどまあいいか。

では第十話どーぞ！

第十話・道中

・・・朝

日が昇り始め、鳥達が囀る(さえずる)気持ちのいい朝・・・
多くの社会人は起きて仕事に行く時間帯・・・
そんな中・・・

蜜「・・・ホントみんなよく寝れますよね・・・」

蜜柑はパーティの中でも一番朝に強い、六時から七時位には起きて身支度を済ませて朝のトレーニングをしている。

蜜「・・・今何時だと思ってるんですかね・・・」ハァ・・・

ちなみに今十時を過ぎている、そんな時間まで寝ていられる誠達を見て思わず溜め息が出る。

蜜「・・・起こしますか・・・」

蜜柑はテントの中で寝ている誠達の所へ歩く、手には大きなバットを携えて・・・

～しばらくの間音声のみでお楽しみください～（ドカッ!!）（バキッ!!）（ちょっやめゴフッ!!）

誠「えーおはようございます皆さん・・・」アイタタ・・・

蜜「おはようございます！」

雅「・・・おはよーさん・・・」イテテ・・・

チ「誠と雅人ー？そのでかいタンコブどーした？」

雅「・・・ゴメン、怖くて口にできない・・・」

誠「実はこれは蜜k「なにかいいましたかー？」・・・何でもないです・・・」

蜜「さ！今日こそ村に行きますよ！時は金なりです！」

チ「時間ってお金なのか！あたい大金持ちじゃない！！」

雅「まあ村は近いからすぐつくだろうしゆったり行こうぜ・・・」

誠「じゃあ俺はボードの上で立ち寝しようかな・・・」

雅「寝てる間に電源切っといてやるよｗｗ」

誠「それだけは勘弁してほしい・・・」

チ「・・・あれ？あたいの天才的発想は無視？」

～道中～

蜜「そういえばチルノちゃんの能力って何ていうの？」

唐突に蜜柑が言う。

雅「え？知らないの？」

天下の？の能力を知らない人なんていたんだ・・・とか雅人が言ってるけどとりあえず放置しておこう。

蜜「え？雅人さん知ってるんですか？」

雅「そりゃゲームやってれば誰でも知って・・・あ～・・・成る程成る程！おkわかった」

そう、俺と雅人は他の世界からやってきているから原作キャラもといチルノの能力を知っているが、この世界で育ってきた蜜柑が見知らぬ妖精の能力を知っている筈が無い。

蜜「？まあいいです、で！チルノちゃん！何て言うの？」

チ「ん？あたいの能力は冷気を操る程度の能力よ！！最強のあたいにぴったりな能力よね！！」

えっへん！と得意げな顔をして威張るチルノ、あ、でも後ろ向いたまんまだと前に木が・・・
・・・ゴチーンとか凄いいい音が聞こえたけどまあ気にしないでおこう。
あ、でも置いてけぼりは可哀想だし背負って持って行くk・・・ほらそこ！チルノは渡さんぞ！

蜜「冷気かー、私もそんな能力がよかったなー」

誠「・・・ん？今凄く蜜柑の言葉が引っかかったんだけど・・・え？もう一回言ってくれない？」

蜜「え？えっと・・・冷気かーって言いました」

誠「もう少しあとの言葉を！」

蜜「えーっと・・・私もそんな能力がよかったなーだった気がします」

誠「え？過去形？って事は蜜柑能力持ち？」

でもそれならあの盗賊事件の時の戦闘能力にもうなずける、あの速さは神ってるねうん。

蜜「え？あ、ハイ。・・・あれ？言ってませんでしたっけ？」

誠「いや初耳なんだけど、雅人は？」

雅「俺も初耳だな・・・」

雅人も初耳だったらしい。

誠「蜜柑の能力ってどんな能力？やっぱり速度とかの能力？」

だったら凄く助かる、変な敵に遭遇しても蜜柑の素早さで先制を取って戦いを有利に進められるしパシ・・・おつかいも速く済ませられそうだし！

蜜「いえ、私の素早さは元々です！速いでしょ私！」

・・・肉体強化した俺らとは違って努力であの速さですか・・・なんか泣けてくる。

雅「じゃあなんの能力だ？何かを操る能力か？」

東方の原作だと大体が～を操る程度の能力である、例外として不老不死とかはニート・・・じゃなかった、チート能力であるけど・・・あれ？俺そういえば半不老不死に肉体強化に想像した物を具現化出来る程度の能力・・・立派なチートです本当にありがとうございました。

蜜「私の能力は、見た能力を真似て自由に使える程度の能力です！すごいでしょ！」

・・・これってチートじゃない？えっと・・・見さえすれば不老不死にもなれるし何でも出せるし何でも出来るって事でしょ？・・・味方でよかった・・・

雅「って事は俺の能力は出来る？」

蜜「腕から刃が出るのならもう完璧に出来ますよ！あとは誠さんの能力も少々出来ますけどやっぱり難しいですね、出せるものは限られているし出せても完璧に再現出来ないし・・・」

誠「努力次第で最強になれる能力だな・・・すげぇ」

まあ逆に言うと努力しないと無能って事か、俺だったら多分努力しないと思うな・・・めんどくさいし。

チ「・・・ハッ！！あたいは一体何を！！」

バ・・・チルノが目を覚ました。全く・・・背負って運んできた俺にお礼ぐらい欲しいな・・・って背中涎すごいんだけど！！え！？何これ！？恩を仇で返されたんだけど！！！

雅「・・・どんまい」

すげぇイラッ☆って来た。

とりあえず服を脱いで能力で出した服に着替える、もう能力に慣れたから出せる場所まで自由になった。俺が認識出来る場所ならばどこでもどんな感じにでも出せる。ただ相変わらず食べ物は無理なようだが。

チ「まだ村につかないの？ホント誠は足遅いのね！」

誠「雅人と同じ速度・・・雅人にちょっと勝てるぐらいじゃまだまだだぞチルノ、俺の脚の速さはあのボルトもびっくりだぜ！」

チ「ボルトって誰？」

誠「あ、えっと・・・俺の生まれた場所の有名人」

・・・間違ってはないよね！世界的な意味では間違ってはないよね！！

チ「へー・・・あ、あれ村よね？」

雅「ん？おお！村が見えた！」

俺も釣られて前を見る、確かに山のふもとに小さな村がある。

誠「やっとか・・・長かったな・・・んで疲れた・・・」

雅「お前ボードで空中浮いてるから疲れてないだろ」

誠「ストレートなツッコミをどうも、んじゃあ・・・」

俺はボードから降りて振り返る。

誠「えー、今からレースをします。一番最初にゴールした人には俺が何かお望みのものを一つ創ってやろう、やる人！！」

雅「念願の乗り物が手に入る！俺やるぞ！！」

チ「あたいだってやるもんね！！」

蜜「じゃあ私も！」

全員が参加するようだ、まあ一位は蜜柑だろうけど。

雅「・・・！そういやお前も参加するのか！？」

・・・あーそれだと俺一位なるしパスしとこうか・・・

誠「俺は審判としてで参加はしないわ、よーしお前ら準備はいいかな！？」

俺の掛け声と共に三人の目が真剣な目になる、雅人は走る構えを取る、対してチルノは浮いてるからか普通の状態だ。蜜柑は余裕なのかなんの構えも無しである、これで一位になるんだろうなぁ蜜柑なら・・・

誠「よーい・・・ドンッ！！」

三人が一斉に飛び出す、スタートはチルノが一番のようだ。
そのすぐ後ろに雅人、その後ろがもちろん密ｋ・・・いねぇ。
まさか蜜柑そんなに速く！？とか思ったらスタート地点にまだいたんだけど。

誠「・・・どした？遅れすぎだぞー？」

蜜「・・・７・６・５」

なんかカウントしてるようだ、ハンデか？ハンデなのか？１０秒もハンデやっていいのか！？

蜜「・・・２・１・０ッ！！」シュンッ・・・

・・・あ、ありのままに今起こったことを話すぜ・・・

蜜柑がカウントを終えたと思ったら消えていた。
な・・・何を言っているのかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわからなかった・・・頭がどうにかなりそうだった・・・催眠術だとかワープだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねぇもっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・

第十話・道中（後書き）

作「実はもっと出来てるんだけど途中で切ったですはい。」

雅「俺今走ってるのかー」

チ「私・・・飛んでる！！」

誠「すげぇ空飛ぶのが夢でした的な発言だな」

チ「流石あたい！」

雅「いやお前飛べるだろ」

蜜「チルノちゃんの飛んでる姿かわいいなぁ・・・」

作「えーでは次回の更新は２８日です！さよなーらー！」

第十一話・超平和（前書き）

予約掲載のおかげでゆっくりと休みが取れた・・・

では第十一話！どぞ！！

第十一話・超平和

チ「一位はあたいだああ！！」

雅「俺だああああああああ！！」

チルノとの差は互角、いや俺の方が少し速くなったようだ。前回のバトルでは遅れを取ったが今回は負けないZEEEEEEEEEEEEEEE☆

雅「ゴールまでもう少し！！このまま行けば俺の勝ち！！残念だったなチルノ！！！」

チ「まだまだああああああ！！！！」

二人ともラストスパートに入る、互いの全力を出して駆け抜ける。僅かだが雅人がリードしている、だがチルノも負けてはいない。ゴールはもう目の前だ、その時。

ブワッ！！

っと後ろからの追い風が吹いたようだ、これは神の助けだと悟り村の入り口へ飛び込んだ・・・

誠「結果発表ーワーパチパチパチパチパチパチー」

雅「ドンドンパフパフ～」

蜜「やんややんやー」

チ「いぇぇぇ！！」

村の入り口でやるとか痛いけどまあ気にしない、まあ村人は見えないし大丈夫・・・多分。

誠「えーまず、第二位から発表、次に三位と一位を発表します！」

雅「おｋ」

蜜「ハイ！」

チ「わかったー！」

三人の同意の声も聞こえたし発表しようか。

誠「・・・第二位、・・・チルノ！！」

チ「嘘だあああああ！絶対最後抜かせたって！！」

チルノが抗議の声をあげる、が、放置。

誠「さて・・・第三位、第一位と順に発表です・・・」

雅「ｗｋｗｋ」

蜜「・・・」

チ「ショボンヌ」

・・・空気が静まり返る、静寂・・・その一言で場を表せる程だ。

・・・・・・・・・・・・・・・

誠「・・・・・・三位雅人一位蜜柑！！おめでとございまあああああす！」

雅「やっぱかあああああああああああクソオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

蜜「まだまだですね雅人さん！」

誠「ハイでは読者の皆様の為にリプレイをどうぞ！」

雅「メタァ・・・」

蜜「メタァ・・・」

チ「メメタァ・・・」

チルノ違うけどまあいいか、どうぞ！

ここからは若本ボイスでお送りさせていただきます、脳内再生するとよりいっそうお楽しみ頂けます。

「これがァ・・・今回のレース、一位がゴールした瞬間を捉えた映像だァ・・・

雅人とチルノの壮絶な戦い・・・そこに現れた疾風・・・

疾風は雅人とチルノを凄まじい速度で抜かしゴールしていたのだァ・・・

そう、雅人が追い風と感じたのは蜜柑が通り過ぎた時の風だったのだァ・・・

雅人が必死こいてゴールへ飛び込んでいる頃には蜜柑はゴール済みだったのだよ・・・」

誠「これが真相です・・・声真似疲れました」

雅「・・・ゴールしても蜜柑が後ろからこないと思ったらやっぱゴール済みかよ・・・」

蜜「てへぺろ☆」

チ「テヘペロ☆」

誠・雅「かわいいから許す」

チ「疲れたー・・・」

チルノが自分の右肩を回しながら言う、今誠たち一同は食堂に来ている。

雅「もぐもぐムシャムシャガツガツ！！」

誠「バリボリムシャムシャゴクゴク！！」

雅人と誠の男二人はどちらが多くのメニューを食えるかで張り合っている。

雅人は主に肉を、誠は主に野菜を中心に頼み食い荒げている。

蜜「もぐもぐ・・・」

チ「はむはむ・・・」

対して蜜柑とチルノは静かにご飯を食べている。

雅「もぐもぐガツガツ！！「あの・・・もう少し静かに食べてもらえませんか・・・」ムシャムシャバクバク！！」

店員の声を気にも留めずに食べ進む、雅人は今２３皿目、誠は２７皿目だ。

雅「お前ムシャムシャ食うの速すモグモグぎだぞ！！」

誠「それなゴクゴクらお前も野バリボリ菜を多く食うんだなムシャムシャ！！」

蜜「飲み込んでからお話してくださいね・・・」

蜜柑が苦笑いする、ふとチルノの方を見ると出された水を凍らせて遊んでいたのでゲンコツを一つ落としておいた。

チ「・・・痛い」

蜜「当たり前です、痛いようにしたんですから」

チルノは半分涙目になりながらもご飯を食べた。

誠「・・・ギブアップだ！！！」バターン！！

雅「お・・・俺も・・・」バターン！！

どうやら誠達の方は終わったらしい、どちらも３０皿でギブアップのようだ。

蜜「（どこにそんな多くの食べ物を入れてるんだろう・・・しかも全然太ってないし・・・）」

少し気になる蜜柑だった。

飯を食い終わり、宿を探しに食堂を出た。そこで俺が蜜柑の方をむ

いた。

誠「そういや何作ってほしい？」

そう、レースで一位になった賞品を作ってもらうのを忘れていた蜜柑。

蜜「・・・あ！・・・あー忘れてましたね・・・」

ようやく思い出し、考え込む、下を向いて指をおでこに付けて考えるポーズをとる。

あ、でもそれじゃ前が見えｎ・・・ぶつかった物が一瞬で切り刻まれて跡形もなく消えていったんだけど。

あ、人にぶつか・・・え？すり抜けた？ねえ今すり抜けなかった？

蜜柑怖。

蜜「・・・あ！そうそう！」

やっと何か思いついたようだ、何だろう？やっぱ女の子だし服？いやいや武器とか言い出すかもしれない。

それとも乗り物？あ、短剣用のワイヤーとかもありえるな・・・あれ？でもこの世界にワイヤーあるっけ？まあいいか。

蜜「私がほしいのは・・・お金です！「ズコーーー！！！」？どうしました？盛大にずっこけて」

まさか現金とか言うとは思わなかった、世の中金なんだね・・・世界って怖いね。

とりあえず・・・現代で言う五万ぐらいでいいだろうか、いやでもどうせいっぱい出せるんだし百万とか・・・

蜜「じゃあ１００円でお願いします「少なーーーーッ！！」・・・・
リアクション大きいですね」

まさかお小遣い価格の１００円とか・・・

誠「・・・ほい！」

誠の手の中から煙が飛び霧散していく・・・残ったのは綺麗な１０
０円玉だけだった。
蜜柑はそれを喜んで受け取りはしゃいでいた。

雅「・・・１００円って・・・」

誠「・・・まあいいんじゃないかな」

蜜「誠さんありがとうございます！！」

誠「いやいやそれぐらいならお礼される程でも・・・」

雅「どぇきとぇぃる（デキてる）」

おい、どこぞの魔道猫みたいな巻き舌でからかうんじゃないよ雅人。

チ「今のどうやってやんの雅人！！」

雅「そうだな、こう舌をグルっと巻くようにしてデキてるって言え
ば出来るな」

チ「どぇきてる（デキてる）」

うん惜しいな、もっとこうとぇぃるの所を強調しt・・・って俺いじられる側なのに心の中で助言してどうする。

雅「もう少しだな、後でみっちり教えてやるからな！」

チ「わーい！」

誠「・・・ハァ・・・」

～宿～

・・・質素だねー

床は畳で覆われ、壁には掛け軸と戸棚、まさに和風の部屋だ。

誠「俺と雅人は右側半分、左半分は蜜柑とチルノで自由に使ってくれ」

雅「おk」

蜜「了解です！」

チ「はーい」

・・・チルノがこんなに素直だとなんか怖いな。

と、その時だった。

村人Ａ「あんたらすぐに逃げなさい！」

と怒鳴りながら部屋に来たのは村人Ａ、てか誰かしらね。

蜜「どうしたんですか？」

蜜柑が冷静に対応する、村人Ａはなんでそんなに冷静でいられるんだという目で見てるけど気にしたら負けだと思う。

村人Ａ「妖怪だよ！妖怪の軍団がこの村に攻めてきてるんだよ！」

雅「へー・・・で、俺達は逃げろと？村はどうすんだ？」

村人Ａ「村は村の用心棒に任せれば大丈夫です！だから逃げなさい！」

誠「おｋ、じゃあ俺達は妖怪を向かえ討ちますかー」

雅「さんせー！」

蜜「同意です！」

チ「ｚｚｚｚｚ」

チルノ寝てるしｗｗｗ

A「あんたら話を聞いていたのかね！！早く逃げないと危ないんだよ！！」

どんだけ妖怪恐ろしいんだよこの人、まあただの人が妖怪を恐れるなというのが無理な話だけどね。

雅「大丈夫、俺達は旅をしていますが妖怪相手でも妖精相手でも勝てますから！」

蜜「ええ、だからあなたは早く非難したほうがいいですよ！私達は大丈夫ですから！」

A「・・・わかった、危なくなったらすぐ逃げるんだよ！」

誠「・・・あ、用心棒の名前は？」

村人Aは走り去ろうとしたところで呼び止められて振り返る。

A「この村の用心棒は政宗と言ってね、剣の達人なんだよ、じゃあ私はもう行くからね」

そういって村人Aは走りさる、にしても政宗とは・・・伊達ですか？レッツパーリィですか？

六爪流で独眼流で奥州筆頭ですねわかります。

雅「・・・ここって東方だよな？なのに政宗って・・・」

誠「・・・気にするな、気のせいだ」

雅「・・・おk」

蜜「さあ早く村の入り口で迎え撃ちましょう！！」

誠・雅「応！！」

チ「ｚｚｚｚｚｚｚ」

こうしてチルノが寝ている間に大乱闘が始まるのだった。

第十一話・超平和（後書き）

作「ういーっす・・・ＷＡＷＡＷＡ忘れ物・・・」

チ「ｚｚｚｚｚｚ」

蜜「ｚｚｚｚｚｚｚｚ」

作「・・・ご、ごゆっくりいいいい！！！」

誠「蜜柑が寝ている時にうかつに近づくとナイフが飛ぶんだよね」

雅「もう慣れました、痛みも」グサッ

誠「では次回にお会いしましょう！さようなら！！」

番外編・日常（前書き）

ネタが無いので誠と雅人の幻想入りする前の日常を・・・

・・・すみません。

それでは番外編始まるよー

番外編・日常

・・・なんだこれは・・・

目の前で多くの友達があいつに食われ、死んでいった・・・

俺・・・誠はその光景を見て逃げるしか出来なかった・・・

こう思いながら逃げている間もまた一人犠牲になっていく・・・

あいつは全身気味の悪い色をした化け物だ、その色を例えるなら・・・

・

・・・ブルーベリーみたいな色をした全裸の巨人・・・

逃げる獲物は強靭な足で追いつめ、脅威的なスタミナをフルに使い

どこまでも追いかけていく。

俺も足の速さには自信があるのだがこいつは俺と互角に走っている。

・・・化け物だ・・・！！

あいつは俺を食おうとあの馬鹿でかい口を開けて追ってくる・・・

ダメだ・・・もうスタミナ限界だ・・・

・・・ここまでか・・・

誠「うわっ！！」

どうやら誠は授業中だと言うのに机に突っ伏して寝ていたようだ、夢でよかったと心底思う。
だが現実程恐ろしいものはない。
ビックリして起きる時にあげた声で周りの視線が凄く痛い、そして先生はファイルを取り出し小さく呟く。

先生Ａ「・・・減点３」

うちのクラスは何故か生徒一人一人に１０点が与えられる、これが０になれば先生直々のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩタイムが始まる。
・・・これがトラウマで授業中寝れない生徒が多いようだが俺には関係ない。
寝たい時に寝る！！仕事したい時にする！！これが人生を楽しく過ごす秘訣よぉ・・・
・・・にしても先生・・・３点は厳しいですって・・・俺あと１点しかないじゃないっすか・・・

誠「・・・ハァ・・・」

カサ・・・と音がした、一瞬ゴキブリでも出たかと思ったが丸められた紙が俺の机に投げられたようだ。
その紙を開き中を覗く。

昨日モンハンでもしまくったかニコニコ見てたんだろ？すこしは自重しなさいっての。
ＰＳ・お風呂上りに耳掃除をすると、湿っている。　　雅人

・・・むかつく、ＰＳが凄くむかつく、聖徳太子級にむかつく。
そして紙を投げた張本人の雅人を見る、熱心に黒板を写していたようだがすぐに俺の視線に気づき、雅人最高のドヤ顔を見せ付けられ

た、え？そこドヤ・・・ってする所なの？ちがくない？

キーンコーンカーンコーン・・・

授業終了のチャイムが鳴る、俺の学校はチャイム式で終わる学校なんで授業終わったら寝てても起きれる安心仕様で凄く嬉しい。
次の授業は・・・体育か、しかも６時間目だから終わったら帰れる！嬉しい！学校なんて消えればいい！
おっと、体育なんだし着替えないと・・・

雅「次の授業は・・・体育か」

体育、しかも今やってる課題は柔道。俺の本領発揮出来る場所だ。
別に俺は柔道部ではない、健康と安全の帰宅部だ、柔道は母親から教えて貰ったけどそこまで本格的ではない。
ちょっと投げ技をマスターしただけだし・・・え、投げをマスターするぐらい普通だよね？よね？

誠「よーくーもー・・・」

・・・あえてスルー。

誠「無視スンナゴルァァァァァァァァァ！！！！！」

猛スピードでこっち走ってくる、ちょ、こっちくんな！！

誠「よくもあんなドヤ顔見せつけやがってぇぇぇぇ！！」

雅「寝るほうが悪いんだよぉぉぉぉ！！」

生徒Ａ「・・・ホント仲いいなお前ら」

誠・雅「うっせぇぇぇ！！」

先生Ｂ「えー今日は大内刈りという技をやってもらいます！」

・・・え？まだそこ？いつになったら実戦やんの？

いや大内刈りなんて初歩の初歩だろ？授業スピード遅くね？

先生Ｂ「えーでは二人ペアを作ってくださーい」

生徒Ｂ「みんなのトラウマｋｔｋｒ」

生徒Ｃ「どうせ俺は余りだよな・・・」

生徒Ｄ「・・・」ハァ・・・

いつも余りになる生徒達が愚痴をこぼす、柔道は軽量、中量、重量

にわかれてやっているので最大三人余ると言うわけだ。

誠「さて、お願いだから本気でこないでくれよ雅人！」

雅「・・・いつになったら本気で投げさしてくれんだ誠・・・」

誠「・・・お前の本気投げは死刑執行と同じだからダメ」

雅「・・・」スタスタ・・・

何故か雅人は誠の方ではなく先生の方へ歩き出す。

誠「お、おい・・・」

雅「先生、一戦いいですか？」

誠「エエエエエエエエエエェェェェェェェ（゜Д゜）ェェェェェェエエエエエエエエ工工工」

雅「誠うっさい」

誠「サーセン・・・」

先生Ｂ「・・・よしいいだろう、多分このクラスでは雅人君が一番強いと思うからね」

雅「ありがとうございます！」

やった！先生とのバトルが出来る！！

誠「おーいみんなー全生徒最強の雅人と全先生最強のＢ先生がバトるぞー！」

こうして俺と先生とのバトルが幕をあけた・・・

ざわ・・・ざわ・・・

誠「えーやってまいりました学校最強決定戦、最強は生徒？先生？実況は私、葉隠　誠がお送り致します」

ピューピューワイワイガヤガヤ！！

誠「解説はこの人、知識なら全生徒一番、あだ名はグーグルのG君です！」

ブーブー！！引っ込めー！！

G「・・・俺戻っていいかな・・・」

誠「解説いないと心細いからお願いします」

G「・・・はい・・・」

誠「では早速ですがGさん、どちらが勝つと思われますか？」

G「普通なら先生と言いたいところですが雅人君は人外な力があるのでわかりませんね・・・」

誠「なるほど、最後まで勝敗はわからないというわけですね、っと、試合の準備が整ったようですね」

G「あ、F君！審判だからってそんなに近くにいると巻き込まれて死にますよー！危ないから離れてー！！」

誠「お、試合が始まりますね！ルールは通常試合と同じ一本勝負！さあ始まります！！」

ビーーーーー！！（ブザー音）

誠「さあ始まりましたこの試合、まずは両者とも間合いをとる！おっと雅人の牽制は先生にはじかれる！！」

G「流石先生ですね、雅人君の素早い牽制を綺麗にはじいていますね」

誠「そして先生からも牽制が入る！だが雅人も華麗にはじく！！」

G「先生の技をはじくとは、雅人君は本当に中学生ですか・・・？」

誠「中学生です多分、っと先生が雅人の一瞬のスキを突き上から覆いかぶさるように攻撃！しかし雅人はこれをすべるようによける！！」

G「先生結構体でかいのにかわすなんて・・・」

誠「そして両者間合いを取る！ジリジリと接近していき雅人先生のすそを掴んだ！！」

G「これは先生危ない！先生逃げて！超逃げて！！」

誠「そして雅人は足を先生の足に掛ける！だが先生体を捻ってこれを回避！！」

G「先生生きててよかった・・・」

誠「おっと先生が雅人よりも長い手を使い雅人の牽制をはじき帯を掴む！！」

G「雅人君なら死ぬ事はまずないでしょうけどこれは危ないですね」

誠「そのまま雅人後ろに倒れる！！先生も連れ込まれるように倒れる！これは巴投げか！？」

G「誠さん、何故しってるんですか・・・」

誠「雅人にやられて死に掛けたことがあったもんで・・・おっと先生回避しようと頑張る！だがもう雅人の足は先生の腹の上だ！！」

G「先生逃げて！！超逃げて！！！マジ逃げて！！！！」

誠「そのまま先生を蹴り上げる！！先生放物線を描き落ちる！！！」

G「先生！！応答してください！！先生！！せんせえええええええええええええええええええい！！」

誠「さて審判・・・判定は・・・！？」

F「・・・一本！！」

誠「決まったあああああああ！！学校最強決定戦、勝者は雅人だあああああああああああああ！！」

G「先生もよく頑張りました・・・」

誠「みなさん！頑張った二人に大きな拍手を！！！」

パチ！！

誠「という夢だったのさ！！」

雅「いや夢じゃねぇよ！！ちゃんと勝ったよ！！！」

帰り道、俺は雅人と今日の体育授業について話していた。

誠「なんで先生に勝てるん？あの先生今は先生だけど高校と大学の時に大会で優勝したらしいじゃん」

雅「・・・母親の教え方がよかったんだなうん。」

誠「流石武神・・・」

雅「いっつも思うんだけど俺の母親のあだ名がなんで武神？」

誠「逆にこれ以上のあだ名はないと思うけど？」

雅「・・・もういいや」

雅「んじゃあな誠！また明日！！」

誠「じゃあな！！」

いつもの分かれ道で別れる二人、夕日は二人を赤く染めるように照らしていたとさ・・・

誠「というわけだ、俺らの故郷はこんな感じだな」

蜜「へー・・・そんな暮らしをしていたんですか・・・」

雅「ぐごぉぉぉぉ・・・ｚｚｚｚ」

誠「あいつも寝ちゃったようだし俺らも明日にそなえて寝ようぜ！」

蜜「はい！」

番外編・日常（後書き）

作「という長い回想の番外編でした！」

誠「最後どういう意味？チルノは？」

作「最後のは夜寝れなかったニ人に故郷のことを語っている誠だな、ちなみにチルノはまだ会ってすらいない」

雅「ほうほう・・・」

蜜「あとがきぐらいメタァ・・・発言もいいですよね！」

作「では次回にお会いしましょう！さようなら！！」

第十二話・大乱闘（前書き）

スマアアアアアアアッシュブラザアアアアアアアアアアアアアズ！！！

言いたかっただけですサーセンｗｗｗ

第十二話・大乱闘

？「・・・来たか」

一人の男が村の入り口で呟く。
その声に応じるように大量の影・・・人ではない、妖怪だ。

男「・・・フム・・・大体百といったところか」

男はゆっくりと立ち上がり腰に携えている刀を抜く。
刀はシャランと音を立てて鞘から刃を出す、刃は湿ったような薄い紫色の輝きを放ち、その姿は妖しくも美しい。

男「・・・こい、妖怪共・・・我が剣の錆に成るがいい・・・」

一匹の妖怪が先陣を切って飛び出す、妖怪は棍棒のようなものを振るう。
だがその攻撃は男には通用せず、一瞬にして妖怪は腹部を切られ消えていった。

男「どうした・・・妖怪よ・・・貴様等の力はこんな物ではあるまい・・・」

男は剣を構えて高速で空を切る、その瞬間前でたじろいでいた妖怪の全身に刀傷が現れ妖怪が消えていく。

男「・・・ム・・・？」

妖怪の集団の中から一匹の妖怪が前に出る、その妖怪から異様な雰囲気を醸し出てくる。

男「・・・フ・・・貴様、他の妖怪とは別格の強さだな・・・」

妖「お前がこの村の用心棒の・・・政宗だっけかァ？ハッ！ご大層な刀持ちやがって、まっ、俺の暇潰しの相手になってくれや・・・」

政「・・・暇潰しだと・・・？貴様、この村をただの暇潰しで潰すと言うのか・・・？」

男・・・政宗の眼光が鋭くなる、政宗の気迫によって弱い妖怪が後退りしていく。

妖「あァそうだがァ？でなきゃこんなボロッボロの腐れた村なんかにこねェってのッ！！ヒャハハハ！！」

笑いながら妖怪は宙に浮き始める。

政「・・・どうやら生きて帰りたくないらしいな・・・よかろう」

刀が光る、刀は淡い紫から赤へと変わり輝き始める。

政「我は『刀（とう）』、我は『将（しょう）』、我は『豪（ごう）』！！
我は一振りの刀にて全ての『弱』を守り、『侵』を滅する・・・
我が名は『政宗』・・・推して参るッ！！！！！」

妖「ハッ！！調子こいてんじゃねェぞ雑魚がァ！！遊んでやんぜェ政宗ちゃんよォ！！」

蜜「・・・すごいですねあの政宗って人」

誠「あぁ、でもあの妖怪のオーラも異常だな、俺が本気出しせば倒せなくはない相手だけどな」

雅「え？どう見てもブレイブルーのハクメンとテルミのバトルって所はツッコミ無し？」

今俺達は物陰に隠れて様子を見ている、あいつら強すぎだろ・・・主に気が、オーラが。

雅「なあ、いつまで隠れて見てんだよ・・・早く援護でもしてやろうぜ？」

蜜「そうですよ、多分政宗さんの力ならあそこにいる妖怪を全滅するぐらい出来るでしょうけど時間がかかりすぎますし」

誠「・・・あ」

雅「・・・？どうした？」

誠「面白い事考えたｗｗｗｗちょっと創ってくるからお前ら戦闘しててていいよー！！」

タッタッタ・・・

雅「あ、おい！・・・行っちゃったよ・・・」

誠「よし創るぞ！・・・うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

ボワ～ン・・・

誠「・・・うーんもう少し重量感を増やした方がいいかな・・・んじゃ、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

ボフン！！

誠「・・・なんか違う、やっぱあれをこうして・・・」

妖「ヒャッハー！！死ねやァ！！！」

政「効かん！！」

妖怪が政宗に向かって殴りかかる、だが政宗は刀の峰で受け流し反撃に出る。

妖怪はそれを予想していたかのように跳躍しかわす。

政「・・・やはり少しはやるようだな・・・」

妖「当ったり前よォ！そんなへなちょこ攻撃じゃ俺に傷一つ付けらんねェぜ！！」

政「フム・・・ならばこれならどうかな・・・？」

スッと刀を鞘に納め柄を握りなおす、全身の力と気を刀を持つ右腕へと収縮していく。

妖「ハッ！真空刃（しんくうは）かァ？んなもんとっくに見切ったってんだァ！！」

刀が淡く輝き始める、その色は先程の赤色が消え失せて刀独特の銀色の光を放つ。

政「刀豪流奥義（とうごうりゅうおうぎ）・・・風迅（ふうじん）ッ！」

目にも止まらぬ速さで刀を鞘から振り抜く、刀は空を切り目には見えない刃が宙を舞う。

妖「んだとォ！？」

一瞬で見えない刃の弾道を読みかわそうとするが間に合わない。

妖怪は体のありとあらゆる所に刀傷が出来、そのまま地に落ちる。

妖「がッ！！」

まともに背中から地面に落ちたせいで息が詰まる。
刀傷が酷いせいか立ち上がる事すら出来ない。

政「・・・終わりだ、悪しき者よ・・・ハァッ！！」

一瞬にして刀を振るい妖怪を消し去る。
周りの妖怪はざわめき、逃げ出していく。

政「・・・懸命な判断だ、二度と村に来るな」

政宗の一言で猛ダッシュで逃げていく妖怪達、そいつらを尻目に見て政宗は村へと歩く。

雅「・・・俺の出番は・・・？」

あの後もう少し見学しておっちゃんがヤバくなったら助けに行こうと蜜柑が提案したので見てたらすぐに終わってしまった。
・・・おっちゃんつええ・・・流石奥州筆頭、レッツパーリィ・・・
いや実際は違う人だけど多分ＢＡＳＡＲＡの政宗を一瞬で潰せる力持ってるな。

蜜「・・・帰りましょうか雅人さん」

雅「おｋ・・・」

誠「ＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ
ＥＥＥ！！！」

夕方、宿の前で考え事をしていた誠に戦闘終了したことを伝えると
こうなりました。
すごく・・・耳が痛いです・・・。

誠「この村の用心棒そんなに強かったのか！？明日挨拶に行かない
と！！」

雅「挨拶？お前が人に挨拶しに行くなんて珍しいな、何か企んでい
るんじゃねーか？」

誠「出来れば戦い方を少々教えて欲しい」

あぁ、確かにそれなら俺も賛成だ。

蜜「・・・チルノちゃんまだ寝ているんですね・・・」

チ「ぐごおおおおおおおおおおおお・・・があああああああああああ・

・・」

え？いびきが五月蝿くないかって？

かわいいは正義、これ絶対。

雅「・・・でだ、今は大体六時ぐらいなんだが・・・飯行くか？」

誠「すぐ行こう今行こうさあ行こう即行こう！！」

蜜「ふふふ、誠さんはご飯の事になるといつもこうですね」

俺が思う誠の動力源ランキング。

第一位・飯

第二位・ゲーム

第三位・ＰＣ

だな。

蜜「さ！食堂に行きましょう！」

誠「うおおおお飯いいいいいいいいいいいい！！」

雅「チルノどうするよ？」

蜜「チルノちゃん！ご飯の時間ですよ！」

シュ・・・

突然チルノの姿が消える・・・え？あれ？今そこで寝てたのに！？

蜜「さあ行きましょう！」

雅「・・・お、おぉ」

誠「でな！雅人先生と戦って勝っちゃってさ～ホントこいつ人か？みたいな感じでな～」

蜜「自分の先生を倒しちゃうなんて凄いですね！」

雅「いやあれは運がよかっただけだって！」

蜜「運も実力の内ですよ！」

雅「そう言われると照れるな・・・」

チ「もぐもぐ・・・これおいしい！あたいが貰ってあげる！！」

誠「あ、コラ！！それは俺が最後の楽しみで取っておいたメロンだ！！！」

チ「へへーん！これはもうあたいの物だもん！悔しかったら名前でも書いておきなさい！」

誠「バカめ！メロンの裏側に名前を書いておいたわァ！！」

チ「うわ！ホントに書いてある！！」

誠「返してもらうぜ！！パク・・・甘くてうまい！！流石メロンだな！！」

チ「うー・・・あたいにも少し頂戴よー・・・」

誠「そら、三分の一位だけどやるよ！」

チ「流石誠！どっかの鈍足男とは大違い！！」

雅「へーそんな奴いるのかー誰？」

チ「雅人」誠「お前」蜜「雅人さん」

雅「え！？満場一致で俺！？ええええ！？」

チ「バーカバーカ！！」

雅「お前に言われたかねぇ！！」

アハハハハハハ

誠「消灯ー！！」

夜、俺と雅人は右側、蜜柑とチルノは左側に布団を敷き明かりを消す。

それでも小さな明かりは置いておく、俺が作った安全ランプだ、たとえ俺が蹴飛ばして引っくり返っても火は消えないし燃え移らない。

消す方法は燃料が切れるか俺が消すかだ。

チ「布団入ったらなんか体が溶けてきた」

誠「気のせいだ、明日早いんだからとっとと寝ろー」

蜜「布団が湿ってきてるような気が・・・」

雅「大丈夫、気のせいだ」

蜜「・・・あの、チルノちゃんの声が聞こえないのですが・・・」

誠「寝たんだろ？蜜柑も早く寝ろよー」

蜜「・・・チルノちゃんの布団にチルノちゃんがいないのですが・・・」

雅「気のせいだって、さあ寝とけー」

蜜「解せません・・・」

第十二話・大乱闘（後書き）

作「えーこのたびは更新が遅れて申し訳ありませんですし御寿司」

誠「・・・これ使い方あってるのか？」

雅「知らん」

作「えっとですね、少し前に身内内でいざこざがありまして、それのせいとテストが凄く多いので遅れてしまいました」

チ「あたい知ってる！しかもそれってゲンザイシンコーケーなんでしょ！」

作「すみません・・・次の更新も遅れそうです・・・」

誠「どうか作者を責めないでやってください、人思いに殺してくやってください」

雅「どうかよろしくお願いします」

作「・・・え？何それ怖い」

雅「では次回にお会いしましょう！さようなら！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8045u/

扉 〜繋がる世界〜

2011年11月17日13時17分発行